

今月の発信——あこら新宿

210号

あこら

北京会議へ

向けて VI

激動するアジアと女性たち——日本を見る目 松井やより

私が見た中国事情 くずめ よし

中国の女性の地位と暮らし 任 小燕

広い中国の多様な生活 張 晶

私の歩んだ道——そして今 袁 晞

目次

巻頭言 世界女性会議へ向かう 高橋ますみ 1

激動するアジアと女性たち
——日本を見る目—— 松井やより 2

私が見た中国事情 くずめ よし 36

中国の女性の地位と暮らし 任 小燕 72

広い中国の多様な生活——五十代の女性の目から 張 晶 85

中国の社会と女性

私の歩んだ道——そして今 袁 晞 96

袁先生のドロナワ中国語(3) 袁 晞 121

あごらめいと 追悼 神戸明美さん 田中寿美子さん 125

世界女性会議へ向かう

高橋 ますみ

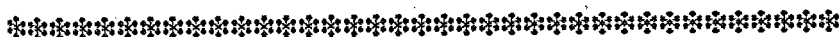
第一回世界女性会議がメキシコであるという。二十一年前、その知らせは、はるか遠くの鐘の響きのように、余韻は、いつまでも私の脳裏でうなり響いていた。

「メキシコへ行けたら」――夢みるようなつぶやきを本気で受けとめ、実現へがむしやりに走りだしたのが斎藤千代さんである。

メキシコシティ、コペンハーゲン、ナイロビ、〈あこら〉は、常に周到な事前準備をし、会期中は、数々のワークショップを開き、情報収集に走り回った。そして可能な限りの資料を特集「あこら」に納めて伝えた。直接参加できなかった人たちや後の世の女性たちへの配慮が常にあつた。

観光買春に手を染めた旅行社は使わない、豪華ホテルには泊らない、アパルトヘイトの国では乗り継ぎすらしない。普通の女が参加できる簡素で格安な旅の計画は、頑迷とすら誤解されるほどのゆるぎない潔癖な精神と、徒労と嘲笑されるほどの労力を要求した。

いま、いざ北京へ。女性たちが、人種、国境を越えて、出会い語り合い、そのネットワークで、地球を丸ごとかかえ込もうとしている。テーマは「不戦・平和」。二十一世紀へ向けて、不可能を可能にしてみせる。世界中の女性たちは、マジ本気である。



「95北京会議への道」連続講座 第四回

激動するアジアと女性たち

——日本を見る目——

松井やより

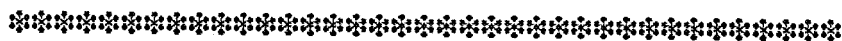
(元朝日新聞編集委員)

松井です。講演ということで人の話を聞くだけでは、身に着かないというか、参加型でやっていくほうがいいと思うので、今日はグループに分かれて、三十分、それぞれのグループで今日のテーマ、①「アジアの女性は日本をどう見ているか」と、②「日本の女性としてどう対応するか」について、日頃感じてもらえることを話し合っ、その報告をしていただいた後で、それを受けて話をさせていただきたいと思います。その後、グループごとに、討論のあらましを報告してください。

グループ

リトルバンコクと呼ばれる土浦にお住まいの方から、「タイの女性と身近に接していて、料理と一緒に作ったりして交流している人に、バブルが崩壊しても残っている女性は、自分が売春で本国にお金を送る必要があつて、意識的に残っている」という話を聞きました。

フィリピンの人はそういうつもりでなく、ルートに乗せられた女性が多い。フィリピン女性と日



本人男性の間の子どもとの問題。その元が、日本人女性が結婚の道を選ばなくなったこともあるのではないか。

男性がなぜそういうものを求めるかという点、「日本人でなければその場限りで楽だ」とか、女性の忍従とか、男の甲斐性だとか。

豊かであるといっても日本では実感できなくて、外国でやっと金持ちだと感じられる。そういう経済にした日本の政治の在り方が、底辺にあるのではないか。

逆に妻と子どもを残して、フィリピンの女性と行方不明になった男性がいて、妻は生活保護を受けている例もある。女性がこういうふうには勉強して、意識が高まっているのに、男性は旧態依然として変わっていないという問題がある。

交流ということでは、たとえば帰国するときに餞別として一人が五千円出せば、何十万になっってしまう。中国でも浮浪児などに、つい人情からお金をやってしまう。結局「お金を持っているから」と、狙われる。逆に日本人は外国で溶け込めないために、すぐお金でかたづけようとする。交流の未熟さがあるのではないか、などの問題が出ました。

グループ2

こちらは北京会議に出席したい方がほとんどでした。

①については、現在では武力ではなく経済力で制圧しているということ。また、お金にものを言わせて買春をしている男性に、妻や母親はなぜ黙っているのか。

農村の花嫁不足のためにタイやフィリピンの女性をお嫁さんにする。跡継ぎが欲しいという目的

だけで、女性の地位の差別はそのままにして花嫁をもらっている。

朝鮮・韓国の人が在日外国人で一番多いのに、いまだに差別をしている。戦争に対してもきちんと謝っていない。これがだいたい①についてです。

②については、斎藤さんがアジアをどれだけ知っているかとまず国名を訊かれたのに、あいまいで、国名すらよく知らないことがわかりました。日本の女性の中にも意識の違いがあつて、婦人会レベルでは「どんな様を大切に」という風潮がまだまだ社会通念としてはびこっている。私たちが「男女平等」なんて言うのと、「自立もしていないのに何を言うか」と、言われたりする。

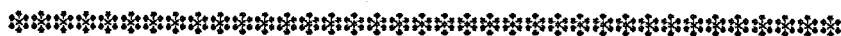
家庭科がやっと今年から必修になったが、進学競争の世の中で、「なぜ家庭科なんて」と母親から出てくる。やはり日本の男を育てたのは女なのだから、女が目覚めないと。男の子に何もさせないで育てたということが、今ツケになっているのではないか。

性の差別意識を許してしまふ。先ほども甲斐性という話が出たが、とんでもない。

結論としては、日本の差別を解消しないかぎり、アジアに対する差別も解消されない、という点で合意しました。

グループ3

前のグループと重なりますので、ポイントだけ話します。タイからの人身売買の記事を見ると憤りを覚えるが、「それを取り締まれないのか」という意見が出ました。それに対して罰則をもうけるというより、我々の意識を変えなければならない。アジアの女性の人権を守ることが、日本女性の人権を守るのだという意識を持つことが大事だということです。



いかにアジアの女性の実態を知らないか。何か他人事で、自分の痛みとして受け止めていない。ではどうするかというと、もつと話し合つて実態を知るほかないのではないか。アジアの女性の痛みを共有するしかないのではないかと。

一方、アジアの女性の中にも、日本人から見ても羨ましい地位を与えられている人がいる。女性の中にも格差があつて、女性の地位と言つても、一様には言えないと思う。実態を知つて、そこから出発するしかないだろう、などと話しました。

グループ4

遅刻してきた者のグループなので十分討論できませんでした。

①については、金持ちの国、女性蔑視の激しい国、と見ているのでは、という二点でした。

②については、ほかのグループと同じことが話題になりました。どんなことをしたらよいかというと、ネットワークづくりが必要だということです。人権意識も、女性の政治参加も、日本はまだまだ遅れている。日本の女性もつとアジアを知ること必要だ。アジアの女性が自立する手立てを援助すべきではないか。ベトナムにミシンを贈った話などが話題に出ました。

どのグループも、それぞれの「アジア」を見つめて下さったようです。小さなグループで話し合つて、アジアの女性の問題が自分とは遠い所の話ではなく、やはり自分の生き方に関係していると感じてくださったのでは、と思います。では、いま日本とアジアの関係の中で、どういう女性の問題を考えていけばいいのかということをお話したいと思います。



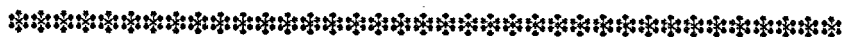
今も変わらない日本男性のセックスツアー

どのグループでも「人身売買」という問題が出たのですが、現在具体的にどうなっているかというところ、一九七〇年代はセックスツアーが大変問題になって、日本人男性が最初は台湾に、日本の植民地でしたので日本語が通じるということもあって、大量に行ったのです。七二年になって日中国交が回復し台湾への航空路が絶たれたことから、日本の旅行会社は日本人男性をソウル―韓国へ送るようになったのです。

皆さんもご存じのように、その頃キーセン観光が問題になっていました。一九七三年に初めて金浦空港で女子大生の「私たちの祖国を日本人の遊廓にするな」というスローガンの小さなデモがあって、全員その場で連行されるという状況だったのです。その小さな記事にショックを受けて、何が起こっているのだろうかと調べたわけです。

その頃すでに日本男性が年間五十万人もキーセン観光に行っていて、日本女性がそのことをほとんど知らなかったことに、さらにショックを受けました。そこに日本の女性と男性の情報のギャップが非常にあったわけです。そういうことでキーセン観光に反対する運動を始めたことが、アジアに関心を持つきっかけになったのです。

旅行会社がツアーを一つの産業として、組織して男性を送るという仕組みが出来上がっているというところに問題があるのですが、次はフィリピンとかタイに送るようになった。現在日本人は一年間に千四百万人も海外に行くのですが、それがいろいろな問題を起こしているわけです。その一



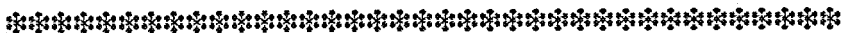
つが買春観光で、その問題をアジア全体の問題として初めて取り上げたのが一九八〇年のマニラ会議でした。そこに出席してから私はこの問題に関わってきました。

一九八一年に当時の鈴木善幸首相が東南アジアの国々を訪問して、最初の訪問地がマニラだったのですが、マビニという歓楽街にある女子大の講堂で、千人もの女性が日本男性のアジアへのセックスツアーに抗議する集会を開いて、それが通信社を通じて世界中に報道されて知られることになりました。そのあとマニラだけでなく、バンコクでも日本大使館に女性たちが抗議文を突き付けるということがあって大きな問題になりました。そうなると日本の国会でも問題になって土井たか子さんなどが外務大臣にこのことを質問されたのです。それがまた報道されて、運輸省が旅行会社に自粛の行政指導をしたりしたものですから、マニラに行く日本人男性の数が一時減ったわけです。

ところが売買春産業というものが、経済の仕組みの中で必要になっている状況はそのままですから、いきなり客が減ると、その仕事に就いている女性たちは、短期的に見ると失業する結果になるわけです。業者は、観光地をマニラからセブ島とか地方に移すことで対応し、女性たちも移動しました。もう一つの対応が、女性たちを日本に連れてくるということです。一九八〇年代から日本の性風俗産業に大量にアジアの女性たちが来るようになったのです。最初に圧倒的に多かったのがフィリピンの女性です。ところが八〇年代半ばになりますと、タイの女性が来始めました。

結婚難の農村に、アジアからの花嫁が

もう一つ八〇年代半ばに起こってきたことは、いわゆる「アジアからの花嫁」の問題です。



実は山形県最上郡の大蔵村とか朝日町では農民たちの結婚難が深刻で、行政が「後継者を作らねば」と、集団見合い旅行をアレンジして、大蔵村では九人の花嫁をフィリピンから連れてきました。それが一九八七年ですから、今年の春はちょうどそのカップルの子どもたちが小学校に入学したわけです。

その花嫁の一人、オリブ須藤さんという女性が本当にひどい状況に追い込まれています。三人の女の子がいたのですが、お姑さんが非常に厳しい人で、「典型的な日本人の嫁になれ」ということで、彼女はフィリピン人としてのアイデンティティーを奪われることに耐えられなくなつて家を飛び出したのです。実は彼女はこんなよくできたお嫁さんはいないというような人で、「フィリピン花嫁の四季」という写真展の主人公でした。野良仕事に精を出し、村の葬式のとときは裏で料理から何から全部やつて、深い雪の中をねんねこで子どもをおぶつて育てている光景など、写真からも健気なお嫁さんだったことがわかります。

彼女はいま新庄市のおだんご屋さんで働いているのですが、自分の娘たちに会うことさえ許されないのです。オリブさんが山形弁で娘たちに語りたかったフィリピンの民話を、東京の民話研究家の女性が聞き書きをしてフィリピン民話集を出して彼女を励ましている、という状況です。そんなケースが最初の花嫁さんのグループに出ているのです。

その他、自殺をしたり、逃げ帰つた花嫁さんもいて、うまくいつている家庭もありますが、全国的に増えている花嫁さんはいろいろな問題にぶつかっているのです。

山形の最上地区では、当初フィリピンの花嫁が一番多かったのですが、今は中国からの花嫁が急カーブで増えています。その場合もインチキ業者が連れてくる場合もあって、日本の農村の男性が



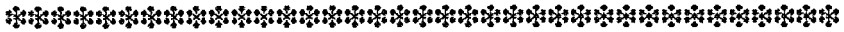
二百万、三百万とお金を払って結婚した相手は、そんな辺鄙な土地だとは知らずに来て、だまされたと逃げてしまうケースもあって、農民のほうも花嫁のほうも、両方とも被害者であるわけです。

出稼ぎ女性と遺棄される母子たち

九〇年代になりますと、日本に來ている出稼ぎ女性の数は年間十数万人と推定されています。そのうちの八〜九割がフィリピンとタイからとで、この二つの国が圧倒的に多く、残りは韓国とか台湾とか、その他のアジアの国々、そして中南米から來て、性風俗産業で働いています。

ところがタイとフィリピンの女性では状況が少し違います。フィリピン女性の場合は、政府が外貨を獲得するために労働力を輸出する政策を採っていて、日本にはエンターテイナーとして“輸出”するわけです。エンターテイナーというのは、芸能人Ⅱアーティストなんですね。日本は外国人単純労働者を受け入れないので、エンターテイナーとして送り込む。しかし、労働者でないですから、労働関係の法は適用されないで、権利を守れないわけです。

フィリピン政府は、日本でフィリピン女性に対する人権侵害事件があつたので、厳しい政策を採るようになって、ビザをきちんと持っている女性を日本に送り込むようになっていきます。それで日本に來ているフィリピン女性の半分ぐらいは、合法的に六か月間は働ける興行ビザで來ているのです。ということは、ある程度自由があるわけです。入管に知られて強制送還されることもないから、外に出て日本人男性とも付き合う機会も多く、子どもができる。子どもができると男が姿を消すというところも起きるわけです。

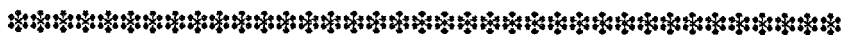


実は、私は今週の日曜まで日比混血児の問題でフィリピンに行っていました。この前、村山首相が訪問したときに、ラモス大統領との会談の中で、大統領の側から「日比混血児の問題について日本政府でも対応していただけないか」という話が出たわけです。なぜこういう問題が起きているかというと、スナックなんかでフィリピンの女性たちと知り合った日本男性は、「彼女たちは尽くすだけでなく、はつきりものも言って、セックスアピールというか魅力がある」という人も多く、子どもができるケースも多いのです。

マニラにバデイスセンターというところがあります。日本への出稼ぎ女性のための団体ですが、日本でいろいろな目にあって逃げ帰った女性たちを援助するのが主な仕事だったのが、二年くらい前から子どもを抱えた女性の相談が激増して、いま具体的なケースとして三百件くらいにもなっているわけです。そのうち百四十件くらいが日本側に何とかしてほしいと訴えています。つまりその女性の八割くらいは日本でエンターテイナーとして働いている間に妊娠して、ビザは六か月ですから帰国して子どもを産み、最初は男性も通ってきたのがブツツリと連絡が途絶えるケースが多く、母子が遺棄されるわけです。もともと出稼ぎに行く女性は貧困階層です。しかも子どもを抱えて働けないので生活に困って、バデイスセンターに来るわけです。

具体的に母親たちが求めているのは、ひとつは子どもの法的な認知です。それから教育にお金がかかるから養育費を払ってほしいということなんです。

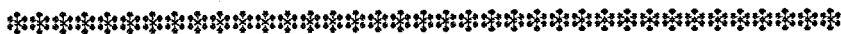
そういうバデイスセンターのケースが日本の弁護士のところに来るようになったので、去年、日比混血児（JFC）のための弁護団というのが結成されたのです。ところが百四十件くらいケースが来ていて、解決したのが十件に満たないのです。なぜかというと父親が行方をくらますケースが



多くて、父親を捜さなくてはならない。やっと捜し当ててもなかなか認知しない。重婚のケースも多いのです。すでに日本で結婚しているのに、書類を偽造してフィリピンで堂々と結婚式を挙げたりするので、弁護士との協力が必要なわけです。いくつか分類しますと、日本で正式に戸籍に入っているケース、フィリピン式結婚だけしているケース、全く結婚していないケースと三つに分かれますが、日本の戸籍に入っているケースは非常に少ないですから、フィリピン式結婚と、全く結婚していないケースが半々だと言われています。

弁護団の推定では、重婚の場合も含めますが、一年にだいたい五千件くらいフィリピンの日本大使館に結婚の届け出がありますから、数万組のフィリピン式結婚をした人がいるわけです。そして、捨てられた子どもは、少なく見積もってもフィリピンに一万人はいるといわれています。

先週、なぜフィリピンに行ったかというところ、日比混血児のための弁護団が出来てもなかなか解決が進まない。なぜ進まないかといえば、弁護団は全く資金がなくボランティアでやっていますから、父親探しにそんなに手間をかけるわけにはいかない。そのためには市民が協力しなければならぬということ、今年の五月に日比混血児の最年長の一人、マリコという子を日本に招いたのです。私はマリコちゃんの家を今年一月に訪ねて行つたのですが、台所とベッドだけの本当に狭いところに母子で住んでいました。その父親は何と海外青年協力隊員なんです（笑）。マニラに駐在していて、近くの食堂で働いていた女性に声をかけて、お手伝いとして住まわせた。性関係を持つて、彼女が妊娠したら、わずか三千ペソ（一万数千円）を「中絶しろ」と与えて、日本に帰つてすぐ日本人女性と結婚しているのです。彼女は十六歳になったばかりですが、本当にすっかりしているのです。その母親は本当に明るい人で、シングルマザーとしてどれだけの苦しみがあったかも知れませんが、



ましたが、やっぱり子どもをしつかり育てるほかないと、下着の行商をしながらマリコちゃんを高校にまでやっているのです。彼女もお母さんを案にさせたいと一生懸命勉強しているのです。

彼女を日本に呼んでシンポジウムを開いたのですが、りっぱな英語で「私がここに来たのは、同じような境遇にある子どもたちに、未来に生きる夢と希望を持って帰りたいからです」と訴えて、しかも「私の母は一度も父の悪口を言ったことがありません。私は何とか父に会いたい」と切々と述べました。夢がかなって結局父親に会えたのです。マリコちゃんは後で言ったそうです。「私はお父さんにプレゼントするTシャツを持ってきたけど、渡さなかった。自分の兄弟に当たる家族の迷惑になるかもしれないから。お父さんに会えて嬉しいという私の心をあげた」と。十六歳の少女のほうが人間として、わが子を見捨てていった日本の男性より一回り上という感じなのです。

私は何人もの日比混血児を訪ねてインタビュースしましたが——私たちはジャピーノという言葉は一切使わないことにしています。「ジャバゆきさんの子ども」ということでいじめられる場合があるのです。バデイスセンターにも「ジャバニーズ・フィリピン・チルドレン」と書いてあります。略してJFCと呼んでいます——本当にしつかりした子どもが多いなと感心したのです。逆境にめげずにたくましく生きています。フィリピンの文化のよさですね。

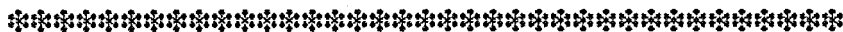
今回なぜ市民ネットワークで現地調査ツアーを送ったかといえば、マニラのバデイスセンターに相談に来られる人はいいい、しかし地方にもたくさんの子どもたちがいる。地方の実態を知ろうと、セブ島と、ミンダナオ島のダバオと中部ルソンと三か所に分かれて日比混血児をインタビュースしたわけです。でもそれは本当に氷山の一角で、フィリピン各地にたくさんの子どもたちがいるのです。私は中部ルソンのアンヘレスという米軍基地だった町に行っただけですが、胸の痛む母親に会いま



した。彼女は車椅子に乗っているのです。なぜかという、日本に何回か出稼ぎに行つて、日本語ができるので、マニラでプロダクションを作るからとスカウトされたそうです。そこで働いていた、暴力団の組長だったオーナーの日本人男性との間に子どもができた。彼は最初は子どもの洗礼式にも子分を連れて出たのでした。ささやかないさかいがあつてその男性に捨てられ、ピストル自殺を図つたのです。生き延びましたが、下半身マヒになつてしまいました。その子どもはヨリコという五歳の子ですが、本当にしっかりといて、「日本のお父さんとお母さんに薬を買つてくれな

いから、大きくなつたら私がお医者さんになつて治してあげるの」と無邪気に言つていました。たまたま日本に働きに行つて子どもができ、経済的困難だけでなく、精神的な苦しみを受けている女性たちに対してバディスセンターでは母親をエンパワーするために、助け合つて生きるにはどうしたらいいかと、いろいろなプログラムを作っています。神戸に住む私の友人は、母親たちが染め物で収入を得られるような、支援プロジェクトをやるうとしています。小さなことですが、母親が力をつけてしつかり生きることが子どもにとつてもいい、ということをやっているのです。

ただ、この問題にはいろいろな見方があつて、日本に売春に来て、子どもができた、それをタネに金を取るために子どもを産むフィリピン女性もいるのではないかなどと、最近の『週刊新潮』に書いてあるのです。中にはそういう女性もいるのかもしれませんが、その背景には、日本とフィリピンの経済格差、賃金水準も一対二十の開きがあるというような、日本へ出稼ぎに来ざるを得ない状況があるわけです。だから私は逆に、日本の無責任な男性からはたくさんのお金をとればいいとさえ思うのですが、日本では男性に対する同情があつて、女性をけしからんという声も聞くのです。しかし一人一人のお母さんに会つて話を聞いてみると、やむを得ない事情がわかります。今度訪



ねた一軒の家は、これ以上ひどいところがあるかというようにつぶれかけた小屋に十人くらいの一
家が住んでいる。二十歳の若い女性が、日本人そっくりの顔をした女の子を膝に乗せていて、日本
に行つて子どもを産んで捨てられたいきさつを話し、「この子のミルクをかうお金もない」と言っ
ていました。母子ともやせ細っていました。

私たちは日比混血児の問題を考えると、母親の人権を考えないといけないと思います。日本人
男性はフィリピン女性を遊びの対象として軽い気持ちでつきあう。フィリピン女性の側は、異国で
の淋しさ、そして日本人と結婚できれば経済的に安定するという希望を持つわけで、日本人と交際
しようとする。そして子どもができて捨てられてしまふ。無責任な父親の記録がバデイスセンター
にありますから、私は同じ日本人として、その非人間的な母子の状況に対してよくも知らん顔をし
ていられるなと思うのですが——そういうことで女性の人権を守ること、もう一つはいろい
ろな事情があつて、たとえお金目当てに産んだケースがあつたとしても子どもには何の責任もない
わけですから、子どもの人権を守るといふことを考えなくてはならないと思います。

それからそのような悲劇を少なくするために、人身売買とかセックス産業に女性を受け入れる仕
組みをどうなくしていくかという、根本問題があるわけです。

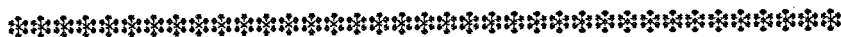
日比混血児を支えるネットワークとして、日本政府がきちんとした対応をするように、少なくとも
も実態調査をして、こういう子どもたちの実情を知るように政府に申し入れをするつもりです。出
稼ぎ女性の次の世代の問題が起こっているわけですから。今は圧倒的にフィリピンの女性から生ま
れる子どもが多いのですが、タイの女性の子どもたちも少しづつ生まれているそうです。



人身売買の果ての殺人まで発生

次にお話したいのは、フィリピンの女性は合法的に日本に来ている女性も多いと言いましたが、タイ女性も人身売買組織で日本に送られてきている場合が多いのです。それで、九九パーセントが「不法」滞在、「不法」就労です。私たちは「未登録」とか「資格外」労働と呼んでいますが、観光ビザでくるわけですから、仕事をしたいいけない、一週間以上滞在してはいけないのに買春スナックなどで働かされることになっているのです。

人身売買の仕組みは、一口で言うとなタイの業者が農村に行つて、「日本に行ったら工場で働ける」とか、「タイレストランのウェイトレスになれる」とか、あるいは「あなたはきれいだから、モデルの仕事がある」というふうな、「日本に行ったら五万円の収入がある」と言うのです。五万円という一十万千バーツです。タイでは大変なお金なんです。大卒の初任給が六千バーツですから、五万円もらったら一家を支えることができると思つて、そのような話に乗るわけです。タイ側の人身売買業者はそれで最初に百万とかを得て、それを日本の輸入業者が二百万で輸入する。そこから仲介業者がそれぞれ取つて、最終的に店のオーナーがまたいくらか取つて、いまタイの女性の取引価格相場は三百八十万から四百万円、——そのお金が彼女たちの借金だと宣告されるわけです。全く関係ないところで勝手に借金を押しつけられ、その分売春で返却させられるひどい仕組みです。景気のいいときは一日五人とか十人の客を取らされれば、二十万にはなりますから二、三か月で返せましたが、いま景気が悪くて客が減つて返す期間がどんどん長くなっている。しかも最近は一



売されて返し終わらないうちに他の業者にまた売られて、そこでまた売春を強制されることになるのです。借金を返して帰国できるのに自分の意志で残って売春を続けているというケースもあると聞きますが、必ずしも自由意志とはいえないのです。

売買春をめぐる国際的にいろいろ違った考え方が出ているのです。欧米先進国では売春を職業としてその権利を求める運動があつて、政府も性の自己決定権の考えを強く打ち出して、売春は個人の自由で、強制売春とは分ける考えになっています。九三年の暮れ、国連が「女性への暴力廃絶宣言」を採択しましたが、その中でも強制売春だけを暴力としています。

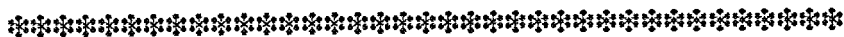
ただ、自由売春と強制売春はどこで線が引けるかですね。タイの女性が日本に残って稼いで家を建てた云々と言つても、なぜそうしなければ家が建たないのか考えなければいけない。つぶれかけた小屋に住まなければならぬ状況がおかしいわけで、強制といつても、物理的、肉体的だけでなく経済的強制があるわけです。大きな経済の仕組みの中で生きるために売春を選ばざるを得ないので、強制とは暴力でぶん殴ることだけではありません。

タイから日本に来て借金を返すまでの期間は完全に性奴隷なんです。四百万を返すまでは逃げられてはいけないから、二十四時間、監視するわけです。その状況から何とか命からがら逃げ出す人が一か月数百人ずつ、一年で三千人くらいの人が何とか逃げ出してタイ大使館にまで辿り着いていますが、数万人のタイ女性の中で、逃げられる人は一部です。あきらめてそのまま借金を返し終わって、後は少しでも収入を得て帰りたい、いったんは売春をした体だし……と、そのまま売春を続ける。そんな状況の中で、監禁、暴力、いろいろな問題があつて、逃げられない人が追いつめられて、経営者を殺して逃げるという悲劇的事件が続々起こっています。タイは仏教の国なのに人を



殺すなんて」と皆さんびつくりされると思うんですが、自分がその場において、「売春は嫌だ」と言っても毎日殴られて、見せしめに従業員からレイプされたり、太つたら客が付かないからと食事を食べさせてもらえないとか、「逃げたら親を殺す」とか脅かされて、タイには本当に殺し屋がいますから信じてしまつて、どうにもならないと極端な手段に出る、そういう状況にいるわけです。

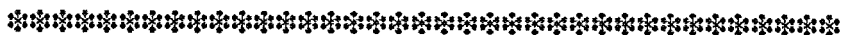
そのようなささまじい虐待の具体的状況は、被告女性の裁判に行つてみるとわかるんです。一度でもいいから傍聴に行つていただきたいのです。一番話題になったのは一九九一年九月に茨城県下館で起こつた下館事件です。三人のタイ女性が一人のタイ人のボスを殺して、強盗殺人罪に問われているのです。なぜなら彼女たちはパスポートの入ったボスのバッグを取つて逃げたんですね。それを開けたら現金が何百万と入つていた。それは彼女たちの売春に対して客が払つたお金ですよ。自分の金同然なのですが、それを奪つたために、金目当てに殺した強盗殺人として起訴されたのです。普通の殺人と違って強盗殺人は無期懲役、または死刑です。ですから九四年二月の検察側の求刑では無期懲役でした。彼女たちがどれほどの虐待と奴隸的状态にあつたかは、公判で明らかになっています。でも金を取る目的で殺したと重刑を要求したのです。しかし、あまりにもひどい目にあつたことを裁判官も認めざるを得なくて、五月の判決は懲役十年でした。温情判決などと言われましたが、日本に連れてこられて、徹底的に搾り取られて、その揚げ句逃げようとして、ボスを殺して懲役十年——皆さんも傍聴に行かれたら、ごく普通の農村でどこでも見かけるタイの女性たちですから、なぜそんな目に遭うのだろうと思ひますよ。確かに自分の意志で売春をしている人たちもいますが、逃げようとしている人たちがいかに多いかです。三人は控訴をして、今度東京高裁で裁判が行われるのですが、彼女たちは拘留所の中にいて、暖房もないから冬はものすごい寒さで、



しもやけで手が腫れあがっています。日本語しかしゃべってはいけなからと、日本語を必死になつて話している。二月にやった集會に彼女がメッセージを送ってきたのですが、日本人が書いたのかと思うような立派な日本語で、我々への感謝の気持ちを伝え、一生懸命生きていくと書いてありました。一人ひとりの手紙を読むと、いかに人身売買の構造が非人間的であるかわかります。

日本に来ている人の中には、タイですでに売られて売春宿にいた女性が、業者から日本に来たらもつと稼げるといわれて、連れてこられたケースもあります。どうせ商売女が日本に来ているんじゃないかと思うかも知れませんが、彼女たちはもともと北部や東北部の農村から買い付けられたわけです。青田狩りという言葉が使われていますが、わずか小学校五年の時に予約をされ、卒業したら売春宿に売られ、その中から容貌なんかでピックアップされて日本に連れてこられたので、もともと売春をやっていたのだから、日本にまた売春に来ているんだと単純に考えることはできません。この下館事件と、もう一つは東京で起こった新小岩事件。これは六人のタイ女性が台湾人のママさんを殺したのです。このケースも、二十四時間ビデオで監視していて、客とホテルに行くのも業者が車で連れていくほどで、わずかのすきにも逃げられない状況だったんです。タイ語をしゃべったら罰金十万円が借金に上乗せされる、そういう状況で六人で殺して逃げたのですが、一番若い人は十五歳ですよ。十五歳の少女を日本に連れてきて売春させている。その女性は未成年ですから家を通じて矯正施設に行ったのですが、通訳をしたのが、たまたま私が女子大で教えたことのある留学生女性で、彼女によるとその少女は「自分の国に帰れたら、頭を刺って仏門に入って一生仏様に仕えることで償いたい」と言っているそうです。

五人の成人女性たちは裁判を受けていて、公判は月に一度開かれますから、ぜひ行っていただき



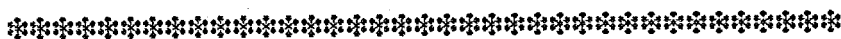
たいと思います。支援のグループもできています。彼女たちはいま東京小菅の拘留所に入っているのですが、差し入れとか面会に行っていたかととてもいいと思います。彼女たちも手紙を日本語でじょうずに書くようになったので、文通で励ましていくのも方法です。

五人の女性のうちの一人は持病があつて、公判のたびに倒れて担ぎ出されてしまうということがたびたびありました。彼女の書いた手紙を読むとすさまじい経緯が書かれています。彼女も仏教徒として育てられたにもかかわらず、人を殺すようなことをしてしまった。ママさんのために喪に服したいと、喪の色は白ですから、白い服を着て、白い花を差し入れてほしいと言っています。

彼女はだれとも面会はしないので、東京拘留所に白い花を差し入れに行つたことがあります。『あごら』に以前「朝鮮女性アケミとタイ女性アケミ」という文章を書かせていただいたのですが、このタイ女性の源氏名がアケミでした。花を差し入れに行つた数日後にたまたま石川逸子さんという詩人の詩が目にとまりました。石川さんはアジアの戦争被害者を追悼する詩をたくさん書いておられる女性なんです。彼女の詩集に『千鳥ヶ淵に行きましたか』というのがあります。その中の朝鮮人慰安婦を悼む詩が目止まりました。その詩の題は、「チョヌン ヨギエ イツスムニダ——私はここにいます」という韓国語です。一人の少女が慰安婦として引っぱられ、日本の軍人たちの餌食になり、戦争が終わつても結局帰つてこなかったことを哀切に綴つた詩です。何とこの少女もアケミと呼ばれていたのですね。

() さん

「あけみ」と呼ばれた あなた



あなたの名前は分かりません

あなたの死んだ日も 死んだ場所も

あなたの骨が

いま どこに 怨みを吞んで埋まるかも

このアケミと呼ばれた少女慰安婦を悼んだ詩を読んで、今、人身売買の被害者としてセックス産業で性暴力、性搾取を受けて、殺人犯としてつながれているタイの女性もアケミと呼ばれている。この五十年間、今の人身売買と、かつての慰安婦問題がつながっていると、直観的に感じざるを得なかったので、『あごら』に書かせていただいたのです。

誰のための経済発展か

九四年の三月に「女性の人権 アジア法廷」というのを東京で開いたのです。これは現代の人身売買、かつての慰安婦問題、軍隊による性暴力である基地買春や、PKOの軍隊がいかにカンボジアのプノンペンに売春を拡大させたか、という問題について、被害者や、支援者の女性十数人をアジアからお招きして、証言していただきました。その時の証言と識者に陪審員としてコメントをいただいた記録が明石書店から『女性の人権 アジア法廷』という題で出しました。現在のアジアの女性が直面している性暴力、人権侵害がどういうものか、なぜそれが起こっているのかを考える手掛かりにしたいだと思います。

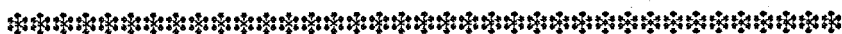


このアジア地域は経済が非常に発展して、「世界中の成長センター」といわれているくらいです。タイの女性たちについても、「タイからそんなに日本に来るの？ よっぽど貧しいんじゃないの」と思われるかもしれませんが、タイは今や、GNPで十何パーセントという世界一の経済成長率です。バンコクに行くたびにすさまじいエネルギーというか、豪華なビルが建ち、日本のデパートは次々に進出し、かつての貧しい都市とは全くの様変わりです。しかしいったん農村に行くとういう光景が広がるか、これも私たちが最近読んだ本『語り始めたタイの人々』という題で、やはり明石書店から出したのですが、一人のタイの女性記者が農村各地をまわって、人々から直接話を聞き、実態をルポした胸の痛む本です。バンコクの繁栄の陰で、農村がいかに窮乏化し、女たちや農民が搾取されているか、苦しい状態に置かれているか具体的な話がたくさん載っています。

結局、経済発展は、誰のための発展かということです。英語で「ディベロップメント（開発・発展）」といいますが、そのあり方がいま何よりも問われているわけです。どの本屋に行っても、最近目に付くのは『繁栄するアジア』『二十一世紀はアジアの世紀』と、そのようなめざましい経済発展について書かれた本が何十冊と並んでいます。ところがそこに生きる女性たちについては全く見えてこない。その中で犠牲になっている女性たちの声を一つ一つ拾っていくことが必要です。

先程の発表にあったように、女性の中にも階級差があります。タイにも豊かな暮らしをしている女性たちがいます。大学に行って教育を受けたタイ女性たちと話すと「日本に行く女性？ 金もうけに行きたいのね」と、まるで他人事のように言います。貧しい女性のことがわからないのです。

「アジアの女たちの会」はタイの北部のチェンマイという、一番女性たちが売られてくる地域で、「人身売買問題ワークショップ」を開いて「日本に来るとこんなひどい目にあうから、来ない方が

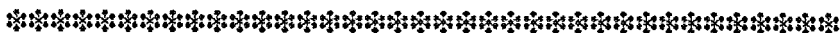


いいんだ」と日本での実情を伝えようとしたんですが、やはり大学の教授のようなエリート女性たちにはピンとこなくて、「貧しい女たちがやっていることだ」と他人事のように見えているんですね。

私たちは日本の中で、グローバルにみるとタイのお金持ちの女性と同じ状況にあるわけですね。だから自分がその身になつたらどうかと考えて、彼女たちとどうつながりを持つか考えなければならぬと思うのです。決して哀れみとか、上から見下すような感情ではなく、何が根本的に問題なのかということですね。これだけ経済発展しているアジアで、人身売買や売買春が広がるのはなぜなのかということです。北京女性会議でも、そのような経済発展、開発というのが「貧困の女性化」を招いている。つまり、貧しいという問題が、ジェンダー、男女で分けてみると女性のほうが貧しくさせられている構造をきちつと見ていかないと、一般的にただ貧しいというだけでは、女性が置かれている状況の深刻さがわからないということです。ジェンダーという言葉が最近よく使われるようになったのは、そういう視点が大切だということです。

ODAという名のまやかしの援助

タイの経済開発が急速に発展している、そういう発展に日本がどのように関わっているかも見なくてはならない。時間がないので詳しいことはお話しできませんが、タイに対してどれだけ巨額のODAを日本が出しているか。日本のODAは一九八九年から世界一になっています。一兆数千億円の経済援助なるものを出していますが、援助のトップは日本からであるという国は三十か国以上で、日本の援助額が二位という国が三十か国くらいです。全体として援助の六割がアジアの国に行



っている。一番がインドネシア、それから中国、三番目がフィリピン、四番目がタイという順番です。それだけの巨額の援助は、もともとは我々の税金とか郵便貯金とかから出ています。そんなに援助が行っているのに、なぜ女性たちが貧困な状況に追い込まれて日本まで稼ぎに来なければいけないのか、何のための援助かが問われているわけです。

そういうことで「アジアの女たちの会」として、ODAの問題もずっとやってきたんですが、三月に「日本のODAとアジア女性」という小さな国際会議を開いて、日本のODAが行なっている五か国のアジアの女性をお招きして、もつと日本のODAを監視していこうというネットワークを作ろうと考えています。フィリピンの「グループ10」という十の女性団体の連合体がこの援助問題に非常に関心を持っているので、その女性たちと一緒に日本のODAをアジアの女性が実際に監視したり、評価したり、注文したりする活動を始めようということを考えています。

ヨーロッパでは、きちんとそのようなネットワークができています。〃開発と女性ヨーロッパネットワーク(WIDE)〃というのがありまして、ニューズレターを出したり、ヨーロッパ各国の援助政策を女性の視点で問うという活動をやっています。ところが金銭的には日本のODAが一番多いにもかかわらず、きちんと監視するということを日本の女性たちはやってこなかったで、そういう活動をこれから始めようと思います。

企業進出という問題も、今や経済がグローバルになって、日本は世界最大の海外投資国です。ODAも世界一の贈与国ですが、海外直接投資、つまり企業進出もトップなんです。そのような経済的パワーを日本は持っている。それがアジアの女性たちにどのような影響があるかということ、きちんと私たちが知っていく必要があると思います。



タイを例にとつても、経済発展の陰で農村が窮乏化していることと、日本のODAとは関係があります。タイには日本企業が一千社以上進出していて、企業の数ではタイが一番多いのでは、というくらいです。そして、あらゆるものを作っています。タイの森も畑も海辺も日本のために使われているという歌ができていくくらいです。海辺に行けば何万ヘクタールもが日本向けのえびの養殖場です。東北の農村に行くと、玉葱をはじめ野菜をいっぱい日本向けに作っています。この前は、タイ米の悪口ばかり言っていました。タイ米を作っている農民のことをどれだけ考えているのだろうか。「私はタイ米を捨てた」とかいう言葉を聞くと、タイの農民が農業を取り戻すためにどれほどの努力をしているか見ていましたので、辛いなと思いました。

タイの東北の農村が窮乏化しているのは、森林が六〇年代からわずかに二、三十年の間に三分の一くらいに減ってしまつて、以前は四十何パーセントが森林だったのが今や十数パーセントです。タイはかつては熱帯森林に覆われていて、木材と米の輸出で持っていた国です。それが森林が丸裸になつて木材を輸入する国になつてしまつた。森はどこへ行つたのか、ということですね。日本もタイからたくさんのお木を輸入していました。森林を切り払うことになつた一つの理由は、輸出用換金作物を作る、日本など先進国に輸出するためのトウモロコシとかタピオカ、綿とかタバコとかを森を切り払つて作る。自国民のためではなくて、外貨獲得のために輸出用の農産物を作ると言うタイ政府の政策の下で森林が消えていったのです。農民は現金を持ちませんから、広範囲にプランテーション的な作物を作るためには、借金をして機械を入れたり、農薬や肥料を買わなければいけません。それを使つてトウモロコシを収穫したら国際的農産物価格が下落しているのでは、先進国にとっては有利な貿易構造ですが、農民は借金を返そうにも払えない。タイの東北の農民の七割が借金

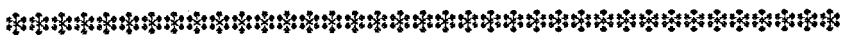


に苦しんでいて、娘たちを売春に売り、夫たちがバンコクへ出稼ぎに行くわけです。

そういうグローバルな経済構造の問題、南北問題ですね。つまり北の豊かな先進国に住んでいるのは五人に一人です。大部分が途上国に住んでいるわけで、十億人の人が飢えているという南北格差がどんどん広がっているという問題。アジアの一部の国は経済成長していますが、内側を見ると一部の人だけが金持ちになり、貧富の格差、都市と農村の格差を拡大させるような経済発展のあり方であるということが問題なのです。

昨日とおととい、北京女性会議に向けてのNGOワーキンググループという、NGOフォーラムを準備する会がバンコクであって出席したんですが、このアジアの経済発展を、もう一度女性の視点で問い直して、どのような発展をしなければならないか、今の発展のように環境破壊をする、女性を物として女性の人権を侵害していくような発展ではなく、もう一つの、オルタナティブな発展とは何か、ということを話し合いました。

そしてアジア・太平洋の女性たちが北京女性会議に向けてポスターを作ろうということを申し合わせたのです。皆各国から持ち寄って選ぶのではないかと。そこにどういう共通のスローガンを入れるかという、英語ですが、「Asia Pacific Women's Vision for the 21st Century」(アジア・太平洋地域の女性の二十一世紀に向けてのビジョン)と決まりました。今この地域で進んでいる経済発展とは違う、私たちはどういう社会を目指していくのかを出していこうじゃないかという意味を込めたポスターを、皆さんの中にもしデザインに関心がある方がいらしたら協力をお願いします。女性のアーティストに限りますので、日本的なデザインのことを何枚か作ればと思います。

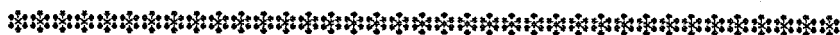


自分の哲学を持つて発言しよう

そういう大きな流れの中で、国連が北京で女性会議を開くわけですが、先程いろいろなグループが言われたようにアジアの女性の問題を考えると、実は日本の女性の問題になるということ。つまり日本の女性がどこまで、自分で自分の人生を決定していける状況にあるのか。エンパワーメントと言いましたが、本当に日本の女性こそもつと力を持たなければ新しい社会を作れないと思います。

先ほど日本の女性の地位が低いとか、性差別の激しい国だというイメージがあるという意見がありました。アジアの女性たちはまったくそのように見えています。日本の女性は存在感がないというか、はつきり物を言わないとか、何を考えているのか、世界に向かって何を言おうとしているのか、メッセージは何なのかわからないと、よく言われるのです。だから私たちはどのような社会にどう変えようとしているのか、日本が周りの国々に対していろいろな問題を起こしていることや、かつての戦争に対して反省をしていないということに対して、もつとはつきりと自分たちのメッセージを出していかなければいけない。それをするのが北京の女性会議の場であると思います。

NGOの役割がこれほど大きくなったのは初めてです。北京女性会議では政府間の会議とNGOフォーラムが開かれます。——十年前のナイロビ会議で、二千年に向けての将来戦略、というものを採択したのです。——十年経って、それがどこまで実行されたらうかということを政府間会議で討論し、そこで二十一世紀に向けての行動綱領を採択するのです。そこに私たち民間の女性の声をどんどん入れていかないう限り、本当に女性の状況を改善する内容にならないわけです。だから

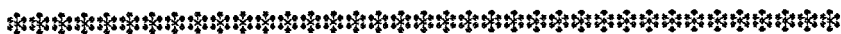


いかにNGOの女性が力を発揮するかということ、国連に対するロビイングのやり方のトレーニングなどまでやっているNGOもあるのです。

北京女性会議の事務局長であるモンセラさん、この方はタンザニアのとても活発な女性で、女性問題担当大臣や、インド大使をなさったり、大変力のある方です。彼女は今回も「北京の女性会議を成功させるかどうかはNGOの女性が鍵だ」、しかも「草の根の女性の声を反映したNGOこそが鍵だ」と、おっしゃっています。彼女は「タンザニアの田舎のお母さんのことを大事にしていって『自分たち女性にとって何か大きなことがあるんだ』と、母が気がつけば北京会議は成功だ」とおっしゃっているんですが、それほど草の根の女性たちにプラスになるかどうかが鍵だと思っています。

日本からも何千人も行くと思いますが、昨日のバンコクの会議でも「日本からは何人来ますか」と聞かれて困ったんです。予想もつかないほどたくさんの方が行くようです。行くのはいいんですが、単にこちらが何かをテイク、得るだけでなく、こちらからギブする、寄与するという姿勢がないと、一方的に過ぎるのではないか、これだけ経済的に周りの国に影響を与えている国の女性としては無責任ではないか、やはりはつきりしたメッセージを持つていかなければと思います。

もう一つ、私は女性の人身売買リサーチプロジェクトに関わっています。部落解放同盟や在日の団体が作った反差別国際運動という国際的人権団体がアジア各国の女性たちと協力して、人身売買の実態をきちんと調べていって対応しよう、というプロジェクトを昨年からは始めたのです。関連する条約や国際法とか典型的なケースとか、男性の買春意識を調べようとか。さっきも、あるグループの方が「白いのがいい」とか「黒いのがいい」とか、女性を買うことが当たり前のように話している日本男性の意識について話されましたが、男がなぜ女の性を商品として買うのか、もう少し突



つ込んで知る必要があるわけです。売買取春というと、売る側の女性ばかり注目されていますから。私は男性の意識について調べる担当になったのですが、重要なテーマです。この人身売買についてのワークショップと、先程お話ししたODAのテーマのワークショップをフィリピンの女性が提案していますので、協力するつもりです。

アジア・太平洋の女性も「NICS（新興工業国）の経済発展と女性」ということで、どのような経済発展を私たちは考えるのかというようなワークショップを開き、その関連でオルタナティブな（もう一つの）経済や生活を実践しているアジアの女性たちのワークショップを日本の呼び掛けでタイ、インド、香港などの女性と開きます。

昨春秋、日本で開いた「東アジア女性フォーラム」は、特にアジア・太平洋の中でも経済発展している東アジアの国々——日本、中国、韓国、台湾、香港、マカオ、モンゴル、そういった国々でどうやったらあるべき経済の発展ができるのかということが、討論されました。このとき採択した「東アジア女性宣言」は北京に向けての行動計画などにも取り入れられました。北京では、毎日二、三百ものワークショップが開かれるそうですし、昨日も中国代表の方が来られてテントもたくさん作ると、おっしゃっていましたので、多彩な活動が行われると思います。

もう一つのアジア・太平洋の女性の重要な活動として、「世界を織りましよう」というキャンペーンがあります。カンボジア女性が担当していますが、布を織ったり、刺繍でもいいですが、何十メートル、何キロにわたってアジアの女たちが持ち寄って、会場に飾ろうという計画です。一メートルの幅の布なら何でもいいそうです。ポスターや布など、視覚的にアジアの女性たちの存在を世界に知らせようということで、是非ご協力いただきたいと思います。

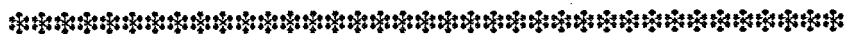


もう一つ大きなテーマは海外出稼ぎ問題で、国連は一九九七年を「国際移住労働者年」にせよという提案もあります。日本にはエンターテイナーとして、韓国、香港などには、家事労働者として、大量のフィリピン女性たちが行っています。バングラデシュやインドネシアからは中東へ働きに行っています。世界で一億人が南から北に移住労働者として国を出ているというグローバルな出稼ぎ、マイグレーション問題があります。そして、海外移住労働者の中での女性の割合が急増しているのです。ですから北京でも、女性という視点でこの問題を考えようというわけです。

日本の特色は、女性たちをエンターテイナーとしてしか受け入れていないことです。今後、高齢化社会で福祉関係、介護労働などにフィリピン女性たちを受け入れる計画もあるようです。看護協会などが反対していると聞きましたが、日系女性はすでに病院や福祉施設に働きに来ています。それがいいことなのか、悪いことなのか。エンターテイナーよりはいいんじゃないかという意見もありますが、私たちが考えていかなければいけないと思います。

Q 先生はとてもお忙しいなか、いくつものグループ活動をなさっていますが、普通の女性たちをどう引っ張り込んでいくかということについて。

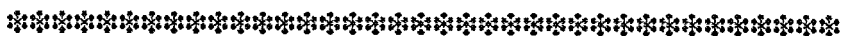
その地域でまず三人でも、四人でも五人でもグループを作ることからしか始まらないと思います。私はこのほかにもへ日比混血児を支えるネットワーク代表とか、カンボジア市民フォーラム女性子ども分科会も担当しているんです。へ市民フォーラムで十一月三日にシンポジウムを開いて、カンボジアから女性をお招きするんですが、ご存じのようにカンボジアの成人人口の三分の二が女



性です。人口全体の半分以上が十五歳以下です。女と子どもの国になっています。そのようなカンボジアの女性や子どもたちが本当に人間らしい生活を取り戻すには何ができるかです。カンボジアの女性というと、戦争で大変だなあと気の毒がるだけですが、それは大間違いで、女性のグループがたくさんできています。今年の三月八日の国際女性デーには売春地帯に行つて、「女性の人權を侵害するな」と抗議したり、いろいろな活動をしています。先程の手織りキャンペーンを担当しているのはカンボジアのケメラという女性のグループです。

一人ではなかなか始められないなら、すでにあるNGOにまず入ってみればいいと思います。東京にあるグループに来られないときは、地域のグループをさがす。なければ関心のあるテーマでグループ学習をしてはどうでしょうか。テーマに関係のあるNGOに連絡して資料をもらったり、人に来てもらうこともよいでしょう。私もいろんなNGOに関わっているので、ちょっとした暇のある人が協力してくれるといいなと思います。

先程ネットワークという言葉が出ましたが、まさにネットワークが日本で広がりにくい面があるのです。最初カンボジアのフォーラムに私は行けなかったんですが「二百人も人が集まってきたから、これからも一緒にやっていくためにいいアイデアはないですか」と、ファックスが入ったんです。率直に言つて、関わる人がなかなか長続きしないんですね。そういうことにコミットすると、家庭が大変だとか、夫が忙しいとか、子どもがどうかとか、日本の女性は家族の負担にどうしても縛られているんですね。自由が利かない。そういう意味で意識変革とか、なぜこれが必要かと自分自身に納得させれば、少々家族に犠牲をかけても子どもに自分が遅く帰ることを説明できて、子どもたちもそういうことに関心を持ちますので、いろいろなやり方によつて家族の問題も解決でき



るのではと思います。一人でやると、非常に落ち込んでしまうので、同じ気の合う人でグループを作って励まし合わないと長続きしないのではと思います。

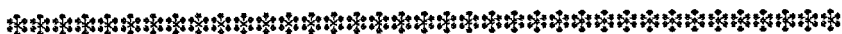
教育現場に携わっている方は子どもたちにこういう問題を話してほしいと思います。いわゆる先進国で日本ほど市民活動に関わる人が少ない国はないですよ。特に女性が何か活動することへのまわりからの心理的プレッシャーが強い。「物好きねえ」とか「変わってるわね」と、浮いてしまうと言うんです。近所づきあいがしにくくなるとか。そういう圧力に負けずにやれるように、まだまだ日本の女性がエンパワーしていく必要を感じます。

Q マスコミでも、もっと取り上げてほしいと思います。

実は私はもう新聞記者ではないんです。九四年の四月に定年退職をいたしましたして、三十三年の記者生活を終わつたのです。定年まで勤めた女性記者は朝日で初めてです。これからはフリーのジャーナリストとして、ミニコミも出して、女性たちに大切な情報を少しでも広げたいと思っています。

Q なぜウィービング（織物）をするのですか。

なぜ織物キャンペーンか提案されたかという点、アジア各国では自分で布を織って着るものを作っている女性たちが今でもたくさんいるわけです。そういう女性たちの技術や芸術的才能を大切にしようということです。カンボジアでもラオスでも、どこへ行っても機を織っていて、織り上



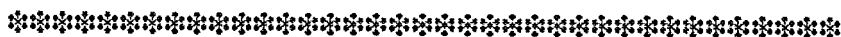
がった布を庭につるしたりしています。日本では今は工場生産になりましたが、織物の伝統があるわけですから、それが再発見される機会になればいいと思います。世界中の女性たちのそういう創意を北京に持ち寄って連帯の気持ちを表すわけですが、世界中の国々の織物を見るのは楽しみです。

Q（男性） 男性で女性問題をやっているグループはありますか。

売買春問題で、ヘアジアの売買春に反対する男たちの会という小さいグループが東京にあつて、谷口和憲さんという方が中心で、最近アジア各地を回って日本人男性に買春についてインタビューしているんですよ、「なぜこういうところに遊びに来るのか」と。そのインタビューを聞くと「安から」というのが第一の理由ですね。そして「女が優しいから」と、言っていますよ。

それから大阪の、やはり売買春など性の問題を考えようというヘメンズ・リブ研究会というグループがニュースレターも出しています。ヘエイジアン・フレンドという、外国人出稼ぎ労働者を支援する会の、水野阿修羅さんという方がやっています。

この二つのグループの方に、「アジア法廷」のジャバンデーの「売買春」分科会に出ていただきしました。お二人とも「なぜ女を買ったか」という自分の体験や、女性との関係について個人的な話をされてました。アジアから来た女性たちは「もっと構造的な話を」と不満を言っていました。日本の女性にとっては、そういう個人的な体験を率直に話してもらったのはよかったです。水野さんも、男子だけの学校で、女性と話をする機会もない、近寄ることもできないという、異常な男性文化の中で男らしくと育ったことを話していました。



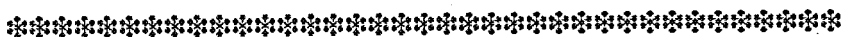
もつともつと男性のグループが出来てほしいですね。アメリカには多いですよ。男性自身が女性を差別する側にいることで、自分が抑圧されていると感じているからです。さつき「日本では女性のほうが目覚めていて、男性の意識のほうが遅れている。男性がお粗末なのが問題だ」という意見が出ましたが、日本の男性についての評判は率直に言って「チャイルディッシュ」に尽きますね。子どもっぽいと。日比混血児のお母さんに聞いても、相手の日本人男性について「自分で決断できない。母親に反対されたら結婚もできない」と、しばしば言われました。

会場意見（男性） 私は女を買ったことなんかはない。そういうのは一部の人ではないか。

そうだと思います。ジャバンデーの分科会でも、「自分は女性を買うなんて考えたこともない」という男性もいて、「ではその違いが出てくるのはなぜか」ということが話し合われました。家庭の教育が影響するとか、学校教育の問題とか、性産業という場所があるから付き合いで行ってしまうとか、ポルノ文化的な刺激—スポーツ新聞や夕刊タブロイド紙なんかささまじいでしょう、そういうものを毎日見ている男性たちが受ける影響も考えなければいけない、などと男性グループの方たちも話していました。

こういう集会上に男性がいらっしゃるのはまだ勇気がいると思います。尊敬します。これから問題提起を期待しています。（拍手）

ここにいらっしゃってる女性たちで結婚している方は、夫にこういう問題をもつと話していただきたいのです。なかなか言えないという状況はあるのですが。特に息子たちに教育していただきたい



ですね。韓国のキーセン観光反対運動をしていたとき、韓国の女性団体からの一番痛烈な手紙はそれです。「日本のお母さんは息子たちをどう教育しているのですか」と。私たちは娘にばかり「変な男にひっかかるな」などといいますが、変な男にしないように（笑）息子たちを教育してほしいですよ。変な男にも必ずお母さんはいるのですから（笑）。

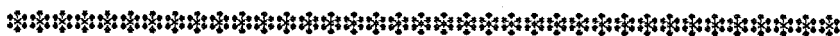
また質問があればへあ（こら）を通じて情報を提供しますのでよろしく願います。（拍手）

斎藤 ありがとうございます。松井さんの熱のこもったお話、これからますます脂が乗るところで、時間が切れてしまつて残念です。北京会議に出る方に是非とも聞いていただきたいと思つていた話をしていただいて、心から感謝します。

今のメンズ・リブの方に申し上げますが、メンズ・リブの会も結構いっぱいあります。へ男が産休を取る会とか、古くからへ看護婦の親父頑張る会とか、たくさんございますが、まずご自分の家庭で、どれだけ家事をシェアするかということが一番大事ではないでしょうか（笑）。子どもが後ろ姿を見て育ちますから。

コペンハーゲン会議で日本の女性の地位が低いという話をしましたら、インドネシアの大学教授から真つ先に「それはあんたたちの責任じゃないか。駐留している日本人を見てみると、男の子は大切にしてお事をちつともやらせない。旦那には三つ指ついて仕える。自分の身から出たサビだ」と言われて、一言もなかったんです。本当にそのとおりですね。

私は日本の学校教育にも、政府にもことごとく失望していますが、これは私たち一人ひとりが夫や子どもをどう育てていくにかかっていると思います。戦争中と同じで男たちには情報がないん



ですね。働き蜂になっていて情報がない彼らにどう情報を伝えていくか。奥さんが働く場合も、なにがしかのお金を得るだけでなく、自分が働いた分、夫の労働時間を減らすという働き方をしたいかないと、状況は良くならないでしょう。大変厚い壁のように見えますが、この何十年間の間に状況はずいぶん良くなっています。もう一押し、私たちがどこに小さな穴を開けるか、それは自分の身の回りに山ほどあります。

先程の織物の話にしても、ナイロビでも日本の手織りを実演したグループがありまして、大変好評でした。そういうアイデアはたくさんあると思います。地方自治体で、何をしようかとお困りのところもあるようですが、NGOフォーラムは、立派なことをしよう、国威発揚、日の丸を押し立ててという感じではないんですね。NGOというのは、国もない、国境もない、この一人一人の私はどう生きているのかということを語り合う場なんですから、大げさなこと考えないで、自分が何を共に語り合いたいのか、考えるところではないかと思っています。今日もいいヒントをいっぱいいただきましたから、ぜひ創造的な計画を考えて頂きたいと思っています。

女性問題についての情報がないということですが、へあごろんには処理できないくらいたくさん情報がありますので、ぜひ手伝いに来てください。ありがとうございます。(二九九四・九・三〇)

(松井やよりさんは九五年春「アジアの女たちの会」の発展として、「アジア女性資料センター」を設立し、『女たちの二一世紀』というミニコミを創刊。連絡先は東京都渋谷区櫻丘一四・一〇・三一
一〇三・三七八〇・五二四五 FAX 一〇三・三四六三・九七五一)

私が見た中国事情

くずめ よし

司会 今日、中国女性史を専攻されている新進気鋭の学徒、くずめさんにおいでいただいたので、お話を伺いたいと思います。

くずめ よしと申します。まだアメリカの大学の大学院生なんですが、専門が中国女性史ということで、「今までそんなものがあるのか」というふうに関心から存在そのものを認められていなかったのが、北京会議のために急に脚光を浴びるようになり、あちこちからお呼びがかかるようになりました。事態の変化に驚いています。

今日は、大阪で講演するために文章をまとめていたところで、そのための情報を得ようとしてきたのですが、「発信しろ」ということですので、それを簡単に要約してお話ししようと思います。大阪でもこういう準備会をなさっているグループがあつて、世界の女性の動きだけでなく、北京へ行くのならば中国の女性の状況をわかっているといかないということ、私が呼ばれることになりました。私がお話しするのは「最近の中国女性について」ですが、私の専門は歴史で、だい

たい百年くらい前のことを研究していますので、話はどうしても歴史的背景の説明に流れる傾向があります。そこが、現代中国を社会学的に分析なさっている方とは視点が違いますので、初めにご了承くださいと思います。

今も強い「中華思想」

お話しすることは三つに分かれていて、一つ目は小学校の地理のような話から始めなければなりません。といいますのも、悲しいことに日本人はお隣の中国のことをほとんど知らないということがありますので、まず基礎のところを踏まえておいてからお話しさせていただきたいと思っています。その次に、ここ百年くらいの中国の女性をとりまく歴史についてお話しさせていただきます。ここ百年の中国の女性の歴史はすごい変化でしたから、それを知らずに女の問題は語れないので、まずそれを知っていただきたいと思っています。三つ目は現在、特にここ十五年くらいの中国の大きな流れの変化の中で、現状とか問題点をお話ししようと思います。原稿を持ってきていないので数字とかは正確に挙げられませんが、要約ということでもよろしく願います。

一つ目は中国の概況ですが、中国は皆さんご存じのように日本の隣にある大きな国ですけど、いまソ連が無くなつてしまいましたので、面積ではアメリカと並ぶ世界で一番大きな国になっています。面積で日本の二十六倍、人口はいろいろな説がありますが、公式発表では十二億ということになっています。

日本の二十六倍の土地に、日本の十二倍の人口だからいいんじゃないかと思われがちですが、こ

れはとんでもないことで、二十六倍の土地のほとんどが砂漠、草原、山地などで、農地にふさわしいところは全体の三分の一ほどしかないわけです。そこに十二億のうち特に漢民族——我々が中国人、英語ではハン・チャイニーズといっている民族——が十二億のうちの九七パーセントくらいの人口を占めていまして、この人たちがいい土地にひしめいていて、その他の草原や砂漠に漢民族以外の五十五の少数民族が——少数といっても一番大きい民族は人口四千万人くらいいますが、散らばって住んでいるわけです。

漢民族と少数民族を十把一からげにくくならなければいけないということ自体が、中国の大きな政治問題なのですが、この豊かな三分の一の土地——チャイナプロバ—と英語で言いますが、日本語では何というのでしょうか——には漢民族が住み、その他の土地に少数民族が住むというふうに分かれています。漢民族地帯の人口密度はとても高いのですが、少数民族地帯の人口密度は逆にとても低いです。今日お話しするのは、おもにこの漢民族の女性たちについてです。

漢民族地帯も北方と南方とで非常に文化が違ひまして、北方は小麦地帯です。女性は基本的に農作業に従事しませんでした。南方は稲作地帯。稲作は女性の労働が必要とされますので、女性は農作業に従事してきた伝統的背景があります。それがどういう影響を及ぼしたかというと、北方では纏足（てんそく）、ご存じでしょうが中国では長い間女性の足を——あれはただ縛るのではなく、三つか四つのときに足を中に折り曲げて縛る、つまり成長を止めるだけでなく完全に変形させてしまふのです——纏足をすることが北方では身分・条件にかかわらず社会の広範囲で行われてきました。南方では女性が農業に従事してきた事情がありますので、纏足は一部上流階級の農作業をしなくていい人に限られたという歴史があります。小麦を食べるか米を食べるかが、女の地位にこんな

影響を与えることがあります。

二つ目は、ここ百年の歴史の話をさせていただきますが、中国四千年の歴史といいますが、世界の四大文明、黄河文明とかメソポタミア文明とかありましたが、中国はその文明がとぎれずにいまだに続いている唯一の国です。しかも世界の人口の四分の一を占めているわけですから、自分たちがこの地球の主人公であるというくらい意識を持っています。これを中華思想というのですが、これは、どの中国人も持っています。こういうことをこちらでも知っておくことが大事ではないかと思ひます。日本人に対する蔑称をついでに言っておきますが「ジャオリベン」、小さい日本です。だからいかに自分たちが大国であり、お兄さんであったか。弟の日本が最近羽振りがいいのをよいことにでかい態度でいることを苦々しく思っている感情がありますから、そこを踏まえておく、変に刺激しないことが必要だと思ひます。

西欧列強と清王朝への反感が結びついて革命運動に

四千年の歴史の伝統社会の中で、地域差や時代差による女性の地位の違いもありますが、今回は近代以降の中国のことについてしゃべらせていただきます。

近代をいつからと見るかというところもいろいろ問題なのですが、中国の場合は一八四〇年にアヘン戦争がありまして、イギリスと中国がアヘンの交易のことで戦争をしたのです。当時、イギリスは中国からお茶を買っていたのです。どんどんお茶を買って銀で払っていて、中国にばかりお金が流れていた。中国はイギリスから買いたいものがなかったわけです。イギリスは困って、すでに

植民地にしていたインドからアヘンをどんどん流して、イギリス人がお茶を飲む分、中国人にアヘンを買わせて貿易収支のバランスを取ろうということをやったのです。

その当時の中国は清王朝で、これは実は少数民族である満州族の王朝だったのです。旧満州地方という漢民族の支配下に入ったことのない地域があり、そこに女真族というのがいまして、非常に勇壮な騎馬民族だったので、豊かな漢民族地域に攻め込んで支配したのです。その女真族をその後満州族と呼びました。それが三百年続いて、アヘン戦争はその一番終わりのころ起こったことだったのです。つまり、この頃、支配者層の一番トップは中国人ではなくて、満州族だったのです。でも人数は話にならない。九九・九対〇・一くらいです。実は、それ以前の中国の歴史の中でも、何度も少数民族の王朝が成立するのですが、結局中国文明化してしまいます。満州族王朝の清も、同様に満州語も忘れるし満州文字も忘れて、結局中国語をしゃべり、漢字を書くということになっていくわけです。

満州族の女の人は纏足をしなかったんですが、漢民族が小さい足を美しいと思っていると「自分たちも小さい足でないと恥ずかしい」と思ってしまうわけです。それでどうしたかというと、ハイヒールみたいなのを作りまして、長いスカートをはいて、スカートからはヒールの部分しか見えないう、すると小さい足で歩いているように見える。そういう策を弄して満州族の風俗と漢民族の美意識を折衷させたりしたのです。これは一つの例ですが、このように満州族はアイデンティティをどんどんなくしていくわけです。つまり、支配の形態にもかかわらず、実際は漢民族の文化的優位はくずれなかったといえるわけです。

そういう状態のところへ一八四〇年のアヘン戦争を突破口としてヨーロッパ帝国主義が中国の侵

略を始めるわけです。アヘン戦争に清王朝は負けるのですが、それを突破口に立て続けに西洋列強は難癖をつけては戦争をふっかけてくる。その度に負ける。負ける度に賠償金を払わなければならない。その結果人々の生活は苦しくなる。その一方で、港を開いて自由貿易を認めなければならぬ、競争力のない国内産業はどんどんつぶれる、租界はできる。どんどん白人が入ってきて、経済的搾取をするわけです。

そこで、中華の漢民族が「だいたい、満州人なんかがトップに立っているからこんなことになるんだ」と、そこで民族意識というのか、清国王朝に対する反感は、三百年綿々とあったのですが、それは西洋列強に対抗して出てきた民族主義の台頭とはイコールではないのですが、そのもともとあった清国王朝に対する反感と、当時起こってきた西洋列強の侵略に対する反感が結び付いて革命運動が起こってきます。

当時の中国も最初は日本の明治維新みたいに、西洋とぶつかった時にどう対応するかと悩んでいたのです。日本は中国が苦勞していたのを横目で見ていたから、知恵が付いたところもあるのですが、中国は自分たちが一番偉いと思っていたところに、自分たちより武力の強い奴が出てきてどうしようと右往左往して、そんなことをしている間に土地は取られるし、国としての支配も危うくなってきた。清王朝を倒して漢民族による中華の漢民族の国を建てよう。そして、西洋を追い払おうという動きが革命運動です。

結局、これは三つ巴のわけです。つまり清という満州族の王朝と、漢民族という人口の大部分を占める人々と、西洋との三つ巴の戦いですから、時には清王朝と西洋が結んで革命派を弾圧したり、時には、農民反乱を起こした人を清王朝が助けて外国と戦うとか、あっちに付いたりこっちに付い

たり複雑なわけです。日本みたいに日本人対外国人というふうに単純ではなく、もつと民族的に複雑になっていていたと考えていただければいいと思います。

果敢で戦闘的なフェミニストも誕生

そこでこの時代に初めて女性たちが近代思想を持ち始め、いわゆるフェミニスト運動が革命運動の中から出てくるんですね。清王朝の終わりの頃には、このままの体制ではそろそろまずいなんて思って近代的な改革を始めます。近代的な学校の制度もその一つです。この近代教育の中からフェミニズム思想が出てきます。それまでも歴史的に女性解放といえるものが少しはありましたが、それはあくまでも思想といえるほどのものでなく、女も男も同じ人間だという大同思想的な発想だったんですね。この頃出てきたのはそれと違って、女は男の支配の下で苦しんでいるんだという人権の視点から声を上げ始めたのが、十九世紀の終わりの近代教育を受けた女の人たちなんです。

その当時は、近代化政策の中で日本に多くの留学生が来ているんです。一番多いときは一万人くらい来ていました。まず日本の明治維新に習って近代化しよう。その中には女子留学生もいます。その人たちの間から革命運動が起きてくる。だから中国の革命運動の温床は日本なんです。中国で革命運動をして弾圧されて、日本に逃げてきて日本で組織を作り直して、また中国に乗り込むというようなことをしょっちゅうやっているんです。その頃の日本は明治の末期に当たるんですが、中国の革命を裏から援助したという動きがありました。

その中から何人か女性の革命家も生まれました。有名な人に秋瑾シュウキンという人がいます。武田泰淳の

小説(註1)にも書かれています。彼女はすごい美人なんです。男装の麗人というんです。刀を持って宝塚のノリで勇ましくて、今から見ても尖鋭なフェミニストというのか、当時の女性で男装して馬に乗って、軍事学校で校長になって男の人に軍事教練をするんです。女子の軍隊も出来たりして、その辺が日本の女性と発想が違うんです。革命だというと、「じゃ私たちも兵士になろう」と、すぐそこまでいつてしまうんです。

同じ頃に参政権運動も始まるんですが、日本でも世界でもまず選挙権を求めますよね。ところが中国の女性にはまず代表権、被選挙権を求めるんです。自分も議員になりたい、そちらが先なんです。といいますのは、昔は科挙という官吏登用試験がありました。官吏になると地位も財産も増える。でもその試験は男性しか受けられない。それはおかしいから女にも受けさせろという意見が歴史上あつたのですが、そのノリで「私たちも議員にさせろ」と言つたのです。ここらへんが、日本人女性とはかなり違う発想で生きていると言えるのではないかと思います。

そうした革命運動を経て、一九一一年、革命が成功しまして中華民国が出来ます。この中華民国はいまも台湾で健在で、台湾は中華民国を名乗っています。でも中華民国が出来たからといって、漢民族が清王朝になり代わつてうまく収まつたかといふとんでもなくて、実は西洋の支配が始まつた頃から清王朝の支配はガタガタしていたのですが、中国は大きい国ですから、軍閥といわれる地方の金も力もある人が自分で軍隊を雇つて自治を行なつていたわけです。実際の清王朝の最期はそういう地方のボスが割拠している、そこに外国の侵略もあるという状態でしたから、トップの政治だけが中華民国になつても、軍閥はそのままなのです。

ですから、中央政府はなかなか支配がうまくいかなくて軍閥を倒して国家を統一するのに十年以

上かかるんですが、その統一のための軍事行動にかなり女性も参加しているんですね。だからそういう意味で、中国の女の人は大和撫子的な「銃後で支える」という発想よりも、まず自分で戦う、敵がいれば自ら戦うという発想でバンバン出ていってしまっているんですが、そのときもバンバン出ていった。その結果、中華民国ということと統一されまして、「黄金の三〇年代」という、近代を謳歌する一九三〇年代が始まるのですが、この三〇年代は同時に日本の侵略が強まる年なのです。

一九三二年の満州事変、一九三七年の日華事変などを経て、中国への日本の侵略がどんどん拡大するわけです。ですから一九三〇年代というのは、片や日本の侵略が本格化していく中で、片や中華民国の統一が実現して、文化が花開いていく、という時代でした。と同時に中国共産党が一九二〇年代に出てきまして、だんだんパワーを持ってきて、またまた三つ巴という様相になります。文化人の中にも共産党に与する人、国民党に与する人、日本軍と仲良くしようとする人、三つ巴でした。女の人たちも、三〇年代頃にはだいたい婦人団体とか組織とかを作っています。実はこの頃の女性の歴史を書いた本が、中国語から日本語に最近訳されました。^(註2)ちよつと値段が高いんですが、この頃の動きを詳しくまとめて書いてあるのはほかにないと思うんですね。その前は十五年くらい前に小野和子さんという人の書かれた『中国女性史』^(註3)というのもあります。これは文革の時の見方を背景に書かれていまして、今読むとちよつと、という部分も少しありますが、いまいった歴史の中で女たちが何をしてきたかということが書いてあります。

中華人民共和国の誕生と男女平等の推進

日中戦争が始まり、日本の侵略があつて、その後日本を追い払い、三つ巴の勢力の一つである日本人がいなくなったので、残つたのは中華民国を統治していた国民党と、新興勢力の共産党でした。共産党は農民の中に入つて土地革命をしたんです。これは地主制度を壊して、耕すものが土地を持てるようにする政策だったのですが、この政策の実施が人々に支持され、共産党は一九四九年に中国の主要都市を占拠しまして、いわゆる中華人民共和国ができます。

これは最初は連合政権で、独裁でなく、いろいろな民主的な政治団体の連合政権だったのです。しかし、その後毛沢東がいろいろな運動を提唱する度にそういう民主勢力は削られて、実質は共産党の一党独裁という形になります。表面上の形式は今もずっと連合政権ですが。

共産党の独裁になってからは、経済政策の失敗があつたり、紆余曲折があつて、一九六六年からいわゆる「文革」という名でご存じの「プロレタリア文化大革命」という文化運動、実質は「第二の革命」と呼ばれる熱狂的な政治の嵐がありました。それを担ったのがティーンエイジャーだったのです。このティーンエイジャーたちは「紅衛兵」と呼ばれました。

「紅衛兵」とは、赤を守るという意味ですが、この紅衛兵たちの大部分は、ある意味で純粋な正義を求めるといふ気持ちから、国の中のあるところとあらゆる伝統的なもの、文化的なものを破壊し尽くします。この中で男女差別は封建的であるとして、かなり過激な反対スローガンが出されます。男女平等はいいことだ、しかも、そのためにはすべての人間が邁進しなければならないというスローガンが、生活の隅々にまで押しつけられたのです。私はこれは世界的な大事件だと思つてゐるんですが、なかなかその視点で見る人はいないんです。それで「その中で行き過ぎもあった」と今ではいわれています。そのときのスローガンは毛沢東の有名な言葉、「時代は変わった。男にできるこ

とは女にもできる」でした。高压電線で作業する女性とか、油田を女たちだけで開拓したとか、そういうのが受けて世界中に宣伝されました。それで「中国の女性はそのままでいったのか」と外国の人間は思ったわけです。ところがその文革が、一九七六年に毛沢東が死んで、その後政変があつて、一九七八年には新しい政策に代わつて、それまで十年続いた文革もひっくり返つてしまいました。その結果、文革中の宣伝はみな嘘だつたということが、今ではわかつています。

改革開放で音立てて変化

三番目には、一九七八年以降の新しい政權のもとでの現状に入ります。一九七八年の十二月に鄧小平を主導にした経済改革・対外開放、略して、改革・開放政策が始まりました。この場合の「かいほう」は「解放」ではありません。「解放」は抑圧者を革命でひっくり返して勝利するという意味になります。「開放」はよその国と仲良く交流しようということですから、意味が違います。

この改革・開放政策の中身ははっきりいつて資本主義化、経済の市場化です。またいつ政策が変わるかもしれないから、もうけられるときにもうけようと、今はみななりふり構わず金もうけをやっています。

私は八四年から八七年まで上海の復旦大学フダタンに留学していました。休みの間は中国じゅうを歩き回りました。そのときは七八年の開放政策の開始から五年が経っていました。中国じゅうが音を立てて変わっていました。でもまだ伝統中国の部分も残つていて、混沌とした時代でしたが、広州とか上海とか北京とかは、すごい勢いで変わっていました。この十五年間は日本の高度経済成長期を

凝縮したくらいの変化だと思っていただいて結構です。

上海で美味しい店を見つけたからそこに食べにいくとすると、次の日に行くともう建て直しているというような状況でした。大学の中でも学生自治体が学校で喫茶店を開いて金もうけしたり、聞いた話では、中国では人々はあまり勝手に旅行できないのですが、お巡りさんになると公務があって旅行できるので、それを利用して行商をしていたり、そういうことが許されていたのです。「何でもあり」の世界になっていました。それが基本的には今も続いています。

自由主義経済下で後退した女性の地位

こういうふうな状況が変化した時、女性たちはどんな経験をしてきたか、というお話に入りますが、主に文革期とその後の改革・開放時代を対比させてお話しさせていただきます。このスパンですと、二十五年間くらいですから、今生きている人の現状をお話しすることになるかと思っています。

文革の時は政治が第一だったのです。経済とか交易とかいうと、資本主義的である、プチブル的であるとかで、政治行動に参加することのほうが重視されたわけです。生産はおざなりにされてきました。共産主義の理想を実現するのだというスローガンを掲げながら、かなり無茶苦茶なことをやっていたことは、最近公開された映画や、今よく売れている小説の「ワイルドスワン」なんかに書かれているので、皆さんもよくご存じだと思います。この時期の女性たちは、疲れることを知らず、男並みに働き、男並みに政治行動に参加する、そういう人がもてはやされたわけです。男女平等がすごく強調されましたから、ちよつとでもやわなことをいうと、つるし上げをくったわけです。

そういう情報ばかりを、私たち外側の人間は聞いていたので、勝手に中国は男女平等が実現したように思っていたのです。その当時、世界で反体制運動なんかをしていた人にとっては、中国はある意味でユートピアみたいに使われていたという背景もあったので、女性解放についても、同様に見てしまったところがあります。

その文革が終わり、改革・開放政策が始まって、女性にとって何が始まったかといえますと、むき出しの資本主義ですから、それまでは一応男女平等というお題目を唱えて、政策もそれに準じることをしなければならなかったのですが、資本主義化してくると国営企業なんかは自主権を得まして、自由裁量できるようになった結果、まず女を雇わなくなりました。新卒の女性には要らない。そんな奴らはすぐ子どものこととか、すぐ保障とかを言うから要らない。新卒の女性が働くところになくなったという問題が一つ出てきました。

文革は生産は第二、平等が第一でしたから、三人でできる仕事を十人でやっていたわけです。それを資本主義化のもとでは非効率だから、急に三人には減らせないにしても、せめて五人に減らそうとしました。余った五人には辞めてもらおう。辞めさせる基準は老・弱・残・女なんです。つまり、老人と、残というのは残疾、今は使わない言葉ですが、身体機能に独自性のある方ですね、弱はからだの弱い人、そして女、これが排除される基準になったわけです。

ただ日本とちよつと違うのは辞めてもらう人には給料の六割を払う。「ま、この金で家でゆつくりしてて」という感じで、女も家に帰らせられたのです。そういう動きを中国では「婦女回家」、日本では「女は家に帰れ」運動と呼んでいます。いわゆる職場で男女平等というスローガンで、文革中に無理やり三人の仕事を十人でやって、女がどんどん職場に入っていたのが、「女は家庭に

入って家事をしろ」と、逆コースというかそういう動きが起こってきました。

そういう現象について、中国ではいろいろな論争が出ました。「日本を見てみる。日本があんなに経済効率がいいのは、男が外で働いて女が家で家事をしているからだ」「だからあれが資本主義制度の一番効率のいいやり方なんだから、あれを真似よう」と、わりと本気でそう思っています。中国の人と話していると、日本では専業主婦しかないと思つていて、しかも従順で夫によく仕え、逆らわず、女の鑑だと憧れを持っているのです。こっちから見ると「えーっ」て感じなんです。そういう動きが一つ出てきています。

それから中国の今の経済状態だと二人が外で働いて、二人に給料を出すから安いんだ。これを一人で全部働いて、家に女がいるというふうにしたほうが、払える給料も増える。そういう論議もありました。これを「オールパオイー」といい、「二包二」と書きます。これはいわゆる近代家族の男女役割分業を中国にも導入しようという動きなんです。が、実際にそれをやっている地域がありまして、それがマスコミで紹介されて、その女の人の「とっても楽でいいわ」というコメントが発表されて、中国じゅうが沸き返りました。

特に反発したのは、長く共産党と一緒に婦人解放運動を担ってきた幹部の人たちです。彼女たちはカンカンに怒って「今まで私たちがやってきた運動は何だったんだ」と、かなり反発が出ました。しかし、若い女の子たちは、テレビでアメリカの五〇年代の古いホームドラマしか入ってこないの、ああいうアメリカンファミリーのイメージを植え付けられて、日本のイメージが主婦のイメージですから、「ああいうほうが楽でいいわ」という女の子も増えて、世代間ギャップも出ています。でも自分たちがこれからいろいろな問題に直面すると改めて考えるとは思いますが、考える前

に「出て行つたほうがいいわ」と、すごい出国ブームです。取りあえず日本に行こうと。みんな日本が好きなのでなく、アメリカに行くステップとしか考えていないのですが。

開放景気で結納金も猛上昇

以上お話ししたのは都市の女性の状況です。それでは、改革・開放が始まって以来、農村の女性はどうなったか、というお話を次にさせていただきます。

文革の時、伝統的な儀式とか儀礼を全部封建的ということで否定しましたから、その後もずっと結婚の時たくさんの結納金を払うなどということは、すごく批判されました。それが改革・開放が始まって、目端が利く人はすごいお金をもうけるようになりました。日本人の感覚でいうと、今まで年収五、六百万とかいう人が突然一億なんてことが出てくるわけです。そうするとそういう人たちは嬉しくて、お葬式とか結婚式とかの機会に自分の富を派手に見せびらかすわけです。見せびらかされると、他の人々もそれに引きずられてだんだん儀礼が派手になっていくのです。改革の結果、実際に豊かになった農村もありますが、儀礼が派手になるのに収入が追いつかないのが現状です。伝統的な儀礼にお金をかける風潮がものすごく激しくなつて、みんなアップアップしています。こういうのは周りがみんなやっていると、自分だけやらないというわけにはいかないのです。

それで何が復活してきたかというと、結納金がすごく上がってきたのです。そうすると、貧しい男性、特に山村、農村の人たちが結婚できない状況が出てきます。日本もそうですが、日本ではアジアからお嫁さんを買って来ますが、中国ではどうしているかというところ、中国の内地で人さらいが

横行して、女の人をさらっていく。全国的な組織が出来て、女の人をさらって農村に売り飛ばすわけなんです。

結納金といいますが、実質は人身売買、それを取り締まるために国もいろいろやってはいるのですが、売り飛ばされた女性たちは、たまたまさらわれる前に結婚していたりすると、重婚罪に問われて女の人が刑務所に入ることになります。そこが民間の現実のレベルと、公法を運営する人の間にあるギャップなのです。「とにかくあなたは二人の男と結婚したのだから重婚罪なんだ」という感じで、つかまる人が多いんですね。人身売買を何とかしようとはしていますが、中国では大人の女の人は高いので、トンヤンシー（童養媳）といって、子どもの時に買って、家内奴隷として使って、大きくなったら息子と結婚させるというシステムが昔からあったのですが、そういう風習も復活しているとかいう話なんです。

今非常に中国の世情は不安定です、はつきり言って。文革期は少なくとも外国人にとっては安全でした。実質鎖国状態でしたから、そういうところに来る外国人は国賓扱いだったのです。ですから外国人にとっては中国は安全な国でした。中国人にとってはそうではありませんでしたが。その後、改革・開放政策になってからも、最初のうちは外国人相手に犯罪を犯すと、普通の中国人をねらったのより罪が五倍から十倍も重かったのです。ちよつとスリをやっただけで死刑になったりで、私がいいた頃はまだびびって手が出せなかったのです。

ところが最近、相手が外国人だと、捕まったら死刑だけど、うまくいったら中国人の感覚で何十億ものお金が手に入るチャンスかもしれないのですから、犯罪者も気合いを入れてやる。中国で被害にあう日本人が増えていますが、外国人を狙う人は命を懸けてやっていますから、かつての安

全な中国という神話は終わったと思ってください。

交通機関なんかもかなりでたらめな運転になっています。かつて中国の飛行機は落ちないので有名でしたが、あれはちよつとでも天気が悪いと、事故は国の威信に関わるので、飛ばさなかったからです。しかし、最近は観光客とにかく運んでもうけようという感じで飛ばしていますから、かなり飛行機が落ちていきます。だから危ないです。中国の安全神話をまだ信じていらつしやる方がもしいらしたら、それは過去のことと腹をくくっていらしたほうがいいと思います。

以上、女性の問題についていろいろと申し上げましたが、まとめて言えば、中国はかつての共産主義のスローガンから、むき出しの資本主義の追求になった。その中で資本主義社会の持つている矛盾を、中国の女性たちも経験せざるを得なくなってきた。それが伝統社会の問題と一緒に起こっているのが、今の中国の女性たちの置かれている状況である、ということです。後は質疑応答の時間としたいと思います。ありがとうございました。

注1 武田泰淳著『秋風秋雨人を愁殺す——秋瑾女士伝』（筑摩書房、一九六八年）

注2 中国女性史研究会編訳『中国女性運動史——一九一九—一九四九』（論創社、一九九四年）

注3 小野和子著『中国女性史——太平天国から現代まで』（平凡社、一九七八年）

司会 中華全国婦女聯合会のエリートの方からは絶対聞けない多彩なお話をありがとうございました。今年はい清戦争（一八九四年）から百年ですね。その百年の話から最近の話、四千年の話と、大きく中国の風土と歴史をダイナミックにとらえた、わかりやすいお話でした。

中国が危険だ、今はアメリカよりも犯罪率が高いとか、よく日本人が狙われるという話は耳にしています。くずめさんのお話で、なるほど用心しなくては、と思いました。中華全国婦女聯合会のほうでは中国国際旅行社の選りぬきのガイドに案内させるとおっしゃっている。この会議中は案外安全かも知れませんが、やっぱり「命懸けで」という話は迫力がありましたね。それを肝に銘じて行ったほうがいいと思います。

では、質問が山ほどあると思いますから、ドンドンしてください。

Q この前新聞に、経済発展の陰で倫理的、道徳的なものの裏付けを必要とするエリートや学者のグループが「儒教が復活する」と言っていると言っていました。以前は、そういう道徳観、信義観はなくなつて、経済発展だけだという報道ばかりでしたが、「儒教が復活」という動きがあるのでしょうか。

儒教の復活ということはたしかに注目されています。実はこれを最初に言ったのは外国の学者です。フランスの研究者でレオン・ヴァンデルメールシュという方が『儒教文化圏の時代』というエッセイを書いたのがきっかけです。この方は中国というよりも、アジアNIES、つまり香港、台湾、韓国、シンガポールなどの経済発展を見て、「もうヨーロッパのキリスト教文化圏は衰退して、これからはアジアの儒教文化圏の時代だ」ということをおっしゃったのです。儒教文化圏というと、日本もそこに入るから、日本人はその話を聞いて嬉しいわけです。日本のおじ様たちが喜んで、一大構想だと持ち上げて、それに中国の学者が乗ったと、一つの流れとしてはこ

うだと思えます。だから、「儒教の復活」というのは、中国においては海外と接触のある人が言い始めたことなんですね。外から「あなたたちは素晴らしい文化を持っているんだよ」と言われて「じゃ、見直そうか」と。それで文革の嵐の中においても孤高を保っていた儒教の学者などが脚光を浴び始めたりしているのです。

でも一般の民衆にとっては、儒教は文革のとき徹底的に批判されていますから、否定的なイメージが強いんです。また文革以前にも二〇世紀の初めの革命運動の頃から、中国の近代化を疎外するものとして、儒教の伝統的、封建的思想がここ百年間批判され続けてきたのです。国内においては、逆に海外華僑は、祖国へのノスタルジーやアイデンティティーの問題がありますから、自分のルーツが素晴らしくあつてほしいという思いから儒教を持ち上げますけれど、本国の中国人はそこまです思っていないと思います。時には中国文化全体を儒教とよんだりするような混乱も見られます。儒教とは何かというのは、実は大問題で、軽々しく「儒教の復活」などと言っても、その実は何を指しているか、はなはだあいまいなのです。

Q 封建的なところは否定しながらも、心理的な部分で儒教が復活しているのですか。

たしかにお上の間では儒教を復活させようという動きはあるんです。例えば孔子廟を建て直したりとか。文革のときの政策から見ると天と地ほどの違いです。でもその目的は結局は観光客誘致なんです。それも特に海外華僑が対象です。お上は儒教、儒教、と音頭を取ってやっていますが、一般の人は自分には関係ないという感じです。民族の文化遺産の継承というよりも、金儲けのために

利用していると言ったほうがよいでしょう。

また一方では、共産主義倫理が崩壊した後で、それに代わる倫理を模索する中で、西欧近代リベラリズムと並んで儒教を見直そうという動きが、一部の学者を中心にあることも事実です。

Q 農村の変化ということで、結納金が上がった後で、人身売買が起こっているという話が出ましたが、農村の変化がどうして人身売買に結び付くのか、もう少し具体的に話してください。

文革のときは人前結婚式というのか、党のところに行つて許可をもらえば良かったんです。その前に中国は婚姻法というのを一九五一年に決定するんです。これは三〇年代に共産党が農村に入つて抗日戦争をしていたときにした、二つの大きな改革の一つを發展させたものです。ちなみにもう一つは土地改革です。婚姻改革以前は、結婚は親同士の話し合ひで決まり、商売的な仲人が仲立ちをしてまとめていたのです。その時には多額のお金が男方から女方へ動くのです。そういう事を共産党は、結婚は男女の自由意志でやるものだとか、かなりキャンペーンをはつて非難し、それに代わる結婚のやり方を提唱しました。この改革は成功し、文革期にはお金の絡まる結婚は表面的には全くなくなりました。実際当時はそんな多額の現金を持つている人もいなかったのです。

それが改革・開放期になって、人々が現金をたくさん持てるようになると、また結婚にお金絡み始めてきたのです。お上も共産主義の理念をひつ込めて「お金儲けしなさい」という感じになつてきたので、おおっぴらに昔の風習が戻ってきて、結婚にお金絡み始めたのです。

そうするとお金のない男の人は結婚できない。でも中国人は結婚できなくても子どもを持つとい

うことが使命ですから、男は妻を手に入れて子どもを持つことに使命感を持っているのです。自分が生まれてきた目的は、先祖からの血の流れを絶やさないことですから、子どもを持たないことは先祖への反逆罪なのです。だから結婚はしなければならない。

「最近嫁を取るのに金がかかる。どうしよう」という感じで、そこへ「嫁を世話してやる」という人が来て、その人にある程度のお金を渡すと、どこからか女の人を連れて来る。実はその女の方は遠くからさらわれてきた人である。信じられないような話ですが、中国は広いから、テレビも何もない山奥に連れてこられたら、自分がどこにいるかわからない。その土地の言葉もわからない。味方もいない。村中は状況を知っていても、「やっとなの男に嫁がきた」という感じで男の味方です。すから、助けを求めても求められないのです。

現在の日本女性には想像できませんが、取り締まりがきびしくなったとはいえ、まだこうした人さらいは横行しているそうです。

中国はもともとお上がきつちり国のすみずみまで支配する国ではなかったもので、中央政府は伝統的に地域のことはその地域のボスに任せていました。そのボスというのは一般人とやくざの間みたいなもので、中国全土に普通にいたのです。それが中国共産党になって一網打尽にされたのです。しかし表面的にはなくなっても「あそこうちとは親父の代に義兄弟だった。何かあったら、言っていこう」という人脈が綿々と続いているのです。そういう人脈が、文革が終わったときに復活して、「黒社会」（ヘイシャー・フイ）というのですが、日本のいわゆるやくざネットワークのようなものがないへん盛んになっています。これがやっている仕事は、一つは密輸、ただし国内の密輸ですが。最近ではアヘンなども密輸しているそうです。そしてもう一つが人身売買。最近ではやくざのす

ごいネットワーク組織が完成しつつあります。知っておいていただきたいと思っています。

Q 一人っ子政策と、大家族制度についておたずねしたいと思います。中国人が日本に一人来ると、その後ろに二十人はいるから、中国人と親しくならないほうがいいと言われたのですが、その実態はどうなっているのでしょうか。

中国はたしかに大家族を重視しましたが、それは観念の上で、実際の生活は核家族が単位です。ただし、同じ名字の家がまとまって一つの村に住んでいて、それを先祖を同じくする一族郎党と考えているので、それを日本人は大家族制度だと思っていますようです。実際山間部に行くと十キロ四方にその村しかないというような感じですから、村というのか、共同体というのか、そういうとらえ方ですね。

一人っ子政策で、男の子ばかり生まれているという状況は確かにあります。中国では伝統的に「子」という言葉は男の子しか指しません。女の子は子ども数に入っていません。女の子が五人いて、男の子が一人いる人が「あなた、お子さんは何人ですか」と聞かれると、「一人です」という。娘が十二人いても、息子がいなければ「残念ながら一人もいません」と答える。つまり中国は厳密な男系血統主義なのです。これは「場」の共同体としての日本の家制度とはかなり違います。

さつきも言ったように中国人の死生観は自分の人生は自分一人で終わらずに、先祖から脈々と伝わって、子孫へ脈々と伝えていくものなのです。この鎖を自分の代で切るなんてとんでもないことです。しかしこの鎖は男の子によってしかつながらないと言う発想です。女は人間ではないわけ

す。特に北方では農業にも従事しなかったので労働力としても女は役に立たないと考えられていたのです。

いま一人っ子政策は都市部ではほぼ百パーセント実施されています。事業所ごとに出産の年間割り当てがあるので、それ以上に産めないのです。それで上司が「今年はおなたとあなたが産んでいいよ」「来年はおなたね」という感じで、許可なしでは産めないのです。上司はその達成率で査定されますから、厳しくやっています。

ただ農村は、農作業が人の手に頼っていますし、特に改革・開放後は集団労働ではなく各農家の請負制になったので、男手がある家が有利なのです。そこで地域の担当者はその事情を考慮して、一人っ子政策は都市ほど徹底していません。

さつきも言ったように女の子は人の数にいけないという発想で、女の子が生まれても届けないのです。男の子が生まれて、初めて「子どもができました」とにぎにぎしく届けるわけです。実は上にお姉ちゃんが三人いたりしてもそれは戸籍に載らないで、黒い子ども——「黒孩子」（ヘイハイズ）と呼ばれています。それが増えていますから、人口調査しても漏れるわけで、人口十二億というのもアバウトな数字です。十五億を越えているのでは、と言う人もいます。

一人っ子政策は一九七五年に提唱され、厳しくなったのが八二年以降なんです。そうすると今十二歳以下の子どもはみな一人っ子のはずですね。ところがその年ごろの子で兄弟を二人くらい連れている人を見かけたりします。そういう人はたいいてい農村の人で、服装などでわかります。ところが私は以前北京で、どう見ても農民ではないなという人が子どもを二人（姉と弟）連れて歩いているのを見ました。その話をすると、中国人は「絶対、農民だ。都会ではあり得ない」と言っています。

した。その時も、周りの人たちは「何であいつ子どもが二人いるんだ？」と、目をまるくして見ましたから、都会ではやはり例外的なことのようなのです。

以上のような理由で、生まれてくる子はやはり男の子が多い。徹底していいとは言っても、厳然と一人っ子政策は実行されています。三人も四人も子どもがいる家が村の八割もあるなんていうと、担当者は管理責任を問われます。ですからやはり強制があります。

その結果、生まれる前の胎児診断性別判断で、女の子とわかると中絶するということがかなり行われています。中絶されるのはまだましで、農村部では診断や中絶手術はお金もかかりますから、それよりも、女の子は生まれるとすぐ殺す。実はこれは伝統的風習としてずっとあったものが、復活しているのです。産婦のそばにたらいを用意しておいて、女の子が生まれるとすぐ水に漬ける。これを溺女とか溺嬰といいます。伝統的な風習ですから、ちゃんとチームがあるのです。それから川に流す。まさしく水子にする。

私がいたときも、中国人の友達が田舎に行つて、川で洗濯をしている女の人と話していたんですが、そこへ赤ちゃんが流れてくる。友達はびっくりしたんですが、女の人は「またか」という感じで平然としている。そういうことが行われているのです。

参加者 A 去年中国に行つたときにも、一人っ子政策に皆の質問が集中したんですね。すると、中国側はかなり色を成して反発しまして、農村では二人、三人まで認められる、ただ間隔をおかなければならない、都会でも間隔をおけばいいようになったと説明したあとで、「この制度がなければ一年間でオーストラリア一国分の人口が増えるんですよ」と言われたのです。戦争がなくなつて人

口が爆発し、道路に人がひしめいて、本当に貧しさを実感した、これは大変だと切実に感じたと言っておられました。

結婚してから何年間は避妊しなければならぬとか、それは徹底しているようでした。だからファミニズムの立場で子どものコントロールのことを言うと、顔色を変えて反論されました。

一人っ子政策のことはそれだけでひとつのシンボジウムが開けるくらいの大問題です。今は政府も少し政策を変えていまして、その一つには少数民族は二人でもいいことになったということがあります。それで何が起ったかと言うと、満州民族は漢民族に溶け込んでいて、自分たちのことを特に満州民族とは言わなかったのです。それが一人っ子政策になると突然「実は私は満州民族だ」と言い出して、急に満州民族の人口が増えたという統計もあります。

それから農村で一人目が女の子だったら、もう一人産んでもいいと、そういうこともやっています。外国からかなりいわれたこともありまして。

実はこの外圧に関しては、あまり知られていない話があります。中国の一人っ子政策がこれほどの国際問題になるきっかけの一つに、アメリカのある白人の大学院生が、中国の農村女性と結婚して、外国人が入れない地域に入って強制中絶なんかの実情をルポルタージュしたということがあります。その報告がアメリカで注目されて、アメリカという国はいまだに「中絶は是か非か」で揉めている国ですから、「とんでもない」ということになった。そして中国の子どもたちを支援していたユネスコにお金を出すのを止めた。ユネスコの予算の半分はアメリカが出していたので、ユネスコは瀕死の状態になったということがあります。そしてそのきっかけのルポを書いた大学院生はそ

の後、その農村女性とは離婚したそうです。

話は変わりますが、中国の民間のフェミニストで李小江さんとおっしゃる方がいて、婦女聯とは別に独自のフェミニズム運動をしています。今年の夏は、この方の鞆持ちで日本中をあちこちついで回ったんですが、どこに行っても一人っ子政策のことが質問で出るのです。この方の見解は、人権侵害という事には一切触れないで、もし一人っ子政策をやらなかったら、中国の女はどうなっていたかという視点から答えていらっしゃいました。そうなたたらたぶん中国の女は、絶対男の子を産まねばならぬという夫や家族の圧力の中で、無理やり子どもを何人も産み続けなければならない。今でもイスラム圏や第三世界で行われている状況になっていただろう。一人っ子政策はそこから中国の女を解放したという点はある。少なくとも都会では一人っ子政策によって、そういうプレッシャーから解放されたし、子育てのエネルギーを自分の社会的な活動に振り向けることができる。昔は都会の女でも五人も六人も産まさせられたから、自分の活動をする時間がなかった。この点は評価してほしい、とおっしゃっていました。私も確かにそうだと思います。中国では、女の体は男の子を産むための道具ですから、男の子を産むまで何人でも産まさせられるのです。一言ではいえない、多角的に見なければならぬ問題だと思います。

Q 香港の返還と台湾との関係について教えてください。

香港では、フェミニズムの発想は欧米とおなじですね。論文も英語で書く地域ですから。世界のフェミニスト運動のネットワークの中に入ってやっているという感じですよ。香港大学の中に女性学

センターがあつて、そこが中心のようです。

台湾は三つ、女性学センターがあります。台湾のフェミニズムは今二つに分かれていて、一つは活動が中心、最近は特に女性と健康の問題に力を入れている〈婦女新知〉、英語では「AWAKE NING」というグループがあります。もう一つは大学の女性学研究センターを中心とする学者のグループで、フェミニズムという言葉を使わずにジェンダースタディーズという用語を使っています。その中心になっているのはアメリカに留学経験のある学者たちです。その半分は男性です。女の声を反映して始まったというより、世界の学術の最先端であるフェミニズムを台湾に導入しようという態度です。それを実際の政策にも反映していこうということを目的としており、そのためにフェミニズムを使わずにジェンダースタディーズ——「両性角色研究」という言葉を使います。それに対して〈婦女新知〉の人たちは「こんな態度の学者なんか女のためには何の力にもならない」と批判しており、この両者はかなり対立しています。

以前から台湾にはいろいろな女性問題がありますが、女性労働問題もその一つですし、また山岳少数民族の少女に対する買春も大きな問題です。もともとこうした問題に取り組む動きはありました。例えば一九七〇年代からの、世界的に連動している第二波フェミニズム、日本でいえばウーマンリブの頃に、やはり日本でいえば田中美津さんみたいなカリスマ性のある人が出てきました。呂秀蓮という方ですが、その人が一年間に十冊くらい本を書くわ、女性のための救援ホットラインは作るわ、女性組織は二十くらい作るわで、凄いいパワーを発揮したんです。その人は反体制だということで国外追放みたいなかたちになり、しばらくアメリカに逃げていました。八〇年代になると日本でも知られている顧燕翎さんたちが始めた〈婦女新知〉の活動が盛んになりました。そして並行

してジェンダースタディーズがある。台湾は今はその状況です。

七〇年代以前では、戦後すぐにリベラルな女性運動が続々と大陸から流れてきたという歴史があります。具体的にいえばYWCAとか、そういうところですが。

Q 台湾と中国の関係は？

基本的にいうと一九四五年に「日中戦争」が終わって、中華民国を支配する国民党と中国共産党の内戦が始まります。結局、共産党が農民の支持を取り付けて政権を握り、他の民主勢力との連合政権の形を取りつつ、実は共産党独裁の中華人民共和国というのが成立するのです。

その時に中華民国政府はどうなったかというと、台湾に引越したのです。中華人民共和国ができて、中華民国政府も形の上では消滅しなかったのです。そして台湾にある中華民国は、あくまでも「全中国を支配する正統な政府」と自分のことを信じているわけです。ですから、大陸にある中華人民共和国を認めていません。あれは反乱軍が臨時的、暫定的に支配して四十年経ったというだけのことです。ですからあれは、共匪、共産党匪賊と呼んでいました。さすがに最近はこの表現は公的にはあまりしなくなりましたが、あくまでも正統政府とは認めておらず、台湾にある自分の政府が正統だと思っています。

台湾はこういう事態になる前にも、問題は、もともとあったわけです。いま山岳にいる少数民族と、漢民族と二重構造になっていたわけです。今度そこへ中国の政府が引越してきたので、三重構造になっているんです。

大陸からきた人が政府のトップを占めているのですが、人数は少ないです。その人たちは台湾一つを見ているのではなく、中国大陸全部の代表だと思っているわけで、国会議員の選挙も、最近まで大陸全部を取り返して各地域の代表を選ぶのが筋であって、台湾の中ではそういう選挙はできないので、選挙しなかったのです。一九四九年当時に議員だった人が選挙をやらないので、何十年も議員をやっているのです。台湾も次の世代が生まれていますから、これでは駄目だと選挙することになりましたが、中華民国からすれば中華人民共和国は存在しないものです。お互いに相手を認めていません。だからといって憎みあっているかというと、それは昔のことで、それまでは三不通というのがあったのです。貿易をしない、手紙のやりとりをしない。行き来をしない。最近はどうでもなく、お上のレベルは関係なく、民間レベルでどんどんやっています。中国のほうでは台湾の経済レベルを当てにして利用したいという気持ちがあります。

一方、香港は、今は逃げられる人は皆逃げて、いまいる人は逃げたくても逃げられなかった人です。すから、ものすごく不安感があります。天安門事件のときも「次は自分たちの番だ」と、そういう気持ちは持っています。

Q 世界女性会議について、台湾の女性はどう受け止めているのでしょうか。

これは最近の東アジア女性フォーラムで会った方の話と、自分の見たことを合わせて話しますが、その前に広島のアジア大会で採めましたね。東アジア女性フォーラムでも「台湾の代表を呼ぶな」と大陸の人が怒って、それに対して台湾の人が最後のあいさつで「台湾は来てるぞー」というデモ

経済力もなく、統制が利いていないのは矛盾の表れだと思います。傾向としてはアメリカを中心とする自動車、マスメディアとか家電製品とか、耐久消費財産業が発展してくると、社会主義も資本主義も同じ方向に行くわけです。

世界的に見て目立つ傾向は、中産階級が増えていることです。中国に似た国にインドがあります。インドは中国と同じで自分が世界の中心だと思っているから、日本人が行っても、辺境から来たようなものです。市場経済では遅れているから、どんどん開放して、インドは二、三年前から開放政策になりました。そして中産階級というものがどんどん出来つつあります。中産階級が出来るようになるかというと、女性の教育水準が上がり、経済力もついてくる。女の権利意識も出てくる。結局体制の違いはあっても、露骨な資本主義化の傾向が出てきて、世界的な大競争時代というか、日本も巻き込まれて円高で悪戦苦闘しているわけです。

だけど政治体制が違っても収斂するのは同じところなのです。どんどん同質化する傾向があると思います。いずれにせよ残っているのは南北問題、南々問題であろうと思います。その中で物質的な動機は強いんですね。そっちへそっちへなびくような気がします。

参加者B もう一つは、中国を華僑圏からとらえないと本当の中国は見えないのではと思います。伝統的に経済に強い国民ですね。だから台湾と中国の問題も、経済上から、いつか怨念やイデオロギーを越えてしまうのでは、と思います。

現実には東南アジアを支配しているのは、華僑といわれる中国系の人たちで、中国人の頭の良さ、惜しまない労力、体力がアジアを支配している。日本人の大東亜共栄圏構想なんていうのはそれに

比べるとまるで根無し草です。日本人はそこまで見ないと、問題の本質を見誤ると思うんですね。

日本人は「武士は食わねど高楊枝」と、商売を低く見ていますが、中国人もそう思っているんですよ。「日本は世界中で物を売りまくって下劣な商人だ」と、向こうも思っているんですね。(笑)

参加者C 一方で物質的なものに執着することを恥ずかしいと考えるところがあるんですね。両国とも。逆にとてもエコノミックアニマルでもあるんですね。

参加者D そうでしょうね。日本はたまたま鎖国だったから東南アジアに進出できなかっただけで、そうでなかったら日僑なんてはびこってたかもしれませんね。

参加者E 人権思想というのはフランスの革命とか、アメリカの独立戦争とか、厳しい市民革命を経たほうが行き渡っていますね。

参加者F もう一つは、キリスト教の桎梏から人権をどう構築するかという長い歴史がありますね。参加者G 血を流さないと人権思想は本当に国民のものにならないですね。

参加者H 経済的ゆとりがないと、人権どころではないし。

参加者I それは中国の人もそう言っていますね。だから天安門のことを言うとき顔色を変える。婦女聯の人も「中国には一億二千五百万人の貧困層がいる。貧しさのために死ぬ人を救うのが中国の一番の人権問題だ」と言っています。

天安門のことですが、中国の民主化運動を私たちが考える時に、ちよつと見誤るところがありま

す。これは私の感じですが、中国で民主化を唱えている人は、インテリで都市階層で地位のある人たちなんですが、その人たちの書いたものを読んでもみると、中国十二億の人が人間として尊重されるべきだと考えているというより、諸外国ではインテリが国のトップリーダーとしての地位と収入を与えられている。中国でも昔から官吏は富と地位と名誉が手にはいったわけです。そういうエリートを敬う文化を持つ国に生まれたエリートの自分が敬われていないのは、伝統文化からしてもおかしい。世界の各国に比べてもおかしい。貴族を貴族として扱え。百姓の共産党が政権なんか握っているから駄目なんだ。貴族の俺たちに政権を返せと。極端な話ですが、どうもそういう匂いがするんですね。それを諸外国の人々は「あの人権弾圧の共産政権が民主化運動をつぶしたぞ」と単純に思っているところがあります。

参加者J 政権を握っている保守派と、改革派があるけど、保守派が主体だという枠は外したくないと思うんですが。

旧ソ連と違うのは、中国は革命第一世代がまだ生きていますよ。旧ソ連では革命で血を流した人はとくに死んでいなんです。そのあと、ノーマンクラトウラで甘い汁を吸った奴と、その下で苦しんだ人しかいないから、政権を倒せるけど。（*旧ソ連の支配者層共産党貴族のこと）

中国の革命第一世代はもの凄いと通っているから。毛沢東は一族郎党、みんな死んでいるんです。自分だけ生き残っているんです。いま生き残っているおじいさんたちは、妻を拷問で殺されたり、子どもを飢え死にさせたりしている人たちですから、そうやって自ら血を流してやっと手

に入れた中華人民共和国を手放すことはありません。死ぬのを待つしかありませんね。

もともとの流れとしては、第一次フェミニズムムーブメントの中で目覚めた人が出てきたという歴史があつたわけです。それは世界的な動きと連動していますけれど。一九二〇年代、三〇年代の社会運動の中で女性運動に的を絞つたりベラルな運動も出てきていますし、中国共産党の中で、社会主義理論にのつとつた女性解放運動もありました。そういう動きはずつとありまして、それが中華人民共和国が成立した時にいわゆる婦女聯合、いろいろな運動をしていた人が大連合しまして、中華全国婦女聯合会を作るのです。これは全国組織で、各地域に支部があります。半官半民団体で、完全にお上^{カミ}ではないのですが、かなり共産党の息がかかっています。女性解放運動をしていた人を、共産党の肝煎りで一致団結させ、女性問題を一括して扱わせていたわけです。中華人民共和国成立以後は婦女工作といって、女性に関わる問題は婦女聯が活動をするという動きが続いているのです。今度みたいに改革・開放政策の中でいろいろな問題が出てきましたね。そういうことに婦女聯は反発して、社会主義女性解放理論に戻ろうと理論活動をしています。当時の文献を集めて出版したりとかですが。

作り、本にまとめたりもしています。全六冊シリーズで、一八四〇年から全部で百年分です。これは地方の人のオーラルヒストリーを集めたおもしろいものです。お上の動きとしてはこういうところですね。連動して女性と児童の法律を作るとか、法律は整備されていましてから「女性と児童の権益を守る法」とか、法律も整えています。

これとは別に七〇年代後半から八〇年代に入って、対外開放の成果として、海外のフェミニズムと連動する動きが出ています。特に先ほど申し上げた李小江さんという人は鄭州大学で欧米文学をやっていて、欧米のフェミニズムに触れざるをえない。そこから中国のフェミニズムを作ろうと、団体を作るわ、本は書くわ、今フェミニズムやっていて、だれか人を呼ぶとなつたらまず李小江というくらいの人なのです。一九九二年二月にハーバードで、中国の女性学についてシンポジウムがありました。そこに来ていたのは、白人で中国のことをやっている人と、中国からアメリカに留学している人で、中国から呼ばれたのが李さんだったのです。そこで李さんが大喧嘩しまして、「白人フェミニズムによって中国女性を分析するな」と。アジアの女性はアジアのフェミニズムを作ろうではないかと。その対立は今でも続いています。次の年の全米アジア学会でも、次の年も、その問題は分科会が開かれて、いま中国の女性を語るときにスタンスはどこに立って言っているか問われているのです。私は今日はイデオロギーフリーみたいな顔をしてしゃべっていますが。

李さんとも話したのですが、あまりにも欧米白人フェミニストの視点からしか語られずに、私たちアジアの女性は単なる研究対象でしかないわけです。相手の現状を見ず、自分の理論で勝手に人を斬っていくことにすごく反発があるわけです。そこで「アジアのフェミニズムを作ろう」と。

ところがよく聞いてみるとアジアというのは中国のこと、中華思想が出てくるのです。私なん

か日本人として「どっちもどっちじゃないの」思ったかもしれませんが。そこであらためてアジアのフェミニズムが問われていると思います。日本人の女として何が世界に言えるのか、言うべきなのか。もう一度足元を見直して、言いたいことを考えていく、それが問われている時代だと思います。

Q 白人フェミニズムでアジアの女性を斬るとは過激な言い方ですが、日本の女性にも当てはまると思います。専業主婦がなまじ女性学に目覚めて、フェミニズム難民を作るなど小室加代子さんが言っていますね。自立できていないのに目覚めて、離婚して、生活保護を受けるという状況をどうとらえるのか。あるいは定年退職離婚をどうとらえるのか。日本人の女として何が世界に言えるのか、ということに、くずめさんは個人的にどう考えますか。

私は半分中国人ですからね。(笑) 日本人といると中国人みたいな気がして、中国人といると日本人だし、アメリカ人といるとどっちかなという感じです。(笑)

司会 ますます伺いたいことが山ほど出てきましたのに、もう時間がないのがほんとに残念です。「自分のスタンスを明確に」とおっしゃいましたが、それこそ、このシリーズを通じてずっと一番考えて頂きたかったことです。北京に出かけるということは、自分を鏡にどれだけ映すかということとです。「何が」は、一人ひとり違うと思うし、「私は何をやってきたのか」という延長線でしか答えられないのでは、と思います。北京までの一日一日を、このことばをかみしめながら生きていきたいと思っています。



「95北京会議への道」連続講座 第九回

中国の友から日本の友人たちへ

司会 中国の公式的な状況については、先日、婦女聯（中華全国婦女聯合会）の方に伺いました。今日は民間人の立場からのお話を伺います。任小燕さんは北京外国語大学の日本語科を出られ、通訳・翻訳の仕事をなさっています。小坂善太郎・田崎嘉平太さんが訪中されたとき、通訳なさった方です。中国のことだけでなく、日本についても良く知っておられるので、普通のビジネスウーマンの感覚から見た中国の女性についてお話しいただくことにしました。また今日は、中国のジャーナリスト、張鼎さんがいらっしゃいました。張さんにも後でお話しいただきたいと思います。

中国の女性の地位と暮らし

任 小燕

任 皆さん、張鼎さんのお話を聞かれましたね。私は彼女と同じ大学の一年後輩です。

一つ質問したいのですが、一度でも中国にいらしたことがありますか。ほとんどの方がありませんね。日本は中国のすぐ隣で、日本人はアメリカに次いで興味を持っているのでは、と思います。人によっては、アメリカよりも中国に対して歴史の面で興味を持っているようですが、平面的に見た

だけでは、家庭のことや職場のことはわからないと思います。私は五年前から、半分中国、半分日本に行ったりきいたりしていますので、日本と中国を比べながら紹介したいと思います。

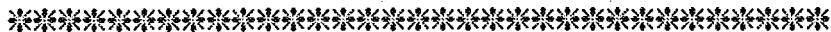
日本よりは高い女性の社会的地位

第一に三つの面から見た中国の女性の社会的地位について。まず職場です。

社会制度が違うので、女性も全部働きます。働いていないのは病気の人がくらいで、みんな共働きです。職場では同じ学歴なら昇給は同じです。昇進するとき、男女によってではなく、能力によって上がります。同じ職場で働いても、人間の違い、男女の違いはありますから、男が強いところもあります。肉体労働は必ず男が強いです。頭脳労働ではそうはいえませんが。私が働いていた会社は通訳が仕事ですが、男性より女性のほうが優秀でした。しかし建築などの分野では男性のほうが優秀でした。中学・高校では女の子が成績がいいです。高校から行きますと、男の子が成績が上がって行きます。中国では男女だけの理由で差別はほとんどありません。人の能力によります。

中国でいま評判になっているのは、対外貿易省の部長の呉儀さんです。GATTでアメリカと涉外した人で、テレビでもよく出ました。日本でいえば通産大臣です。アメリカと商談したとき、中国女性のイメージを強くしました。アメリカ側代表も女性です。結局その商談は成立しませんでした。ただ、頑張ったので人気者になりました。彼女は中国の女性として最高の地位にいます。

ほかには婦女聯で顧問をしている陳慕華さんという人がいます。北京市の副市长は女性です。女性には能力があれば総理大臣にもなれます。しかし社会としては「女性が総理大臣になったら大変だ」



と言っています。歴史的には西太后とか、則天武后とかいいましたが、あまりいい評判ではなかったのです。現代は違います。でも普通の家庭生活で男性は、「母さんがナントかになると大変だよ」などと言います。でも職場では男女平等だと言います。二十年前の文革時代、毛沢東の奥さんの江青さんが、「女性が天の半分を支える」とよく言いました。あの時は能力ではなくて、男と女とどちらが部長になるかというとき、女性になりました。そういう時代もありました。でも実際は失敗したこともありました。やはり性別ではなく、その人の能力で決めないと失敗します。

国会議員は近年来、結構女性が増えてきました。日本でも中国名 李香蘭、今の山口淑子さんが参議院議員になったことは、中国でも有名です。また、土井たか子さんは中国人の日本女性についてイメージを変えました。土井さんは去年銀行問題で訪中しましたが、中国銀行の最高権力者の陳慕華と土井さんは、姉妹みたいだと、みんな言いました。

日本でも男女平等ではないですか。日本の女性が社会で十分働けないから地位が低い、とは全然思いません。中国では「社会分工不問」という言葉があります。この意味は社会的な担当が違う。外で働いても家庭で働いても担当が違うから、地位の上下とは関係ないということです。この言葉は男女についてではなく、頭脳労働者と肉体労働者についていた言葉です。この人は掃除屋で、この人はコンピュータ設計士だからといって、その間に差別があつてはいけません。

しかしいま考えると、これは全く正しいとはいえません。日本でこの言葉を使うと、男女の役割分業を正当化すると思います。日本の男が会社に行つて、女が家庭にいる。これはそれぞれの役割があるからで、両方とも外にいったら子どもはどうなりますか、と以前は言われていましたが、日本でも、今はそういう役割分業が差別の元だと言われるようになりました。



大学に入って、初めて日本のことを学んだとき、日本の女性は家庭にいて地位が低いということばかり習いました。日本に来てみるとそういうことはありません。時代が変わるにつれて、日本女性も社会に入って重要な仕事をしています。ただお金のためだけでなく、精神的に充実するために働いていますね。「日本では、お嫁に行っても女性がそのまま働き続けると、隣から笑われる。ご主人が収入が低いから、家族を養うことができないから働かせるのだと言われる」と、むかしそう聞きましたが、そうではありませんね。

中国ではどうして女も働きますか。一つは収入です。一人しか働かないと、収入は半分になります。女性が働きすぎて疲れると「うちのパパが食べさせてくれたら休みたい」と、よく言います。もう一つは習慣です。女性が結婚してもうちにはかりいる習慣はありません。経済で決まります。

次に家庭での地位をみましょう。家庭で大きなことを決めるときは、夫婦で相談します。一番ゆつくり話せるのは夕食のときですね。共働きでも家事はほとんど女性がやります。帰ったらすぐエプロンを着けて台所に立ちます。男の人は座って新聞を読みます。どこも同じですね（笑）。

一人っ子政策の問題点

十五年前から産児制限が始まりました。夫婦一組で子どもは一人です。中国は人口が多いのでそうしないと大変です。四十代の夫婦はほとんど子ども一人です。あと十年経つと日本と同じ問題が起きてくる、町には老人ばかりで子どもがいなくなる。そういう話も出ています。しかし、一人っ子政策をとらないと、毎年、オーストラリア一国分の人口が増えることになります。世界の国々か

ら人権問題だと言われますが、こうしないと中国人は生きていけないのです。

子どもが一人だから、おじいさんおばあさんだけでなく、両親も子どもを大事にします。国としては人口の伸び率を押さえましたが、家庭では子どもの教育として困る点があります。

子どもは託児所に預けますが、幼稚園もあります。幼稚園は月曜の朝送って、土曜の午後三時に帰ります。私の同僚はみな託児所に預けます。かわいそうだけど仕方がありません。託児所は会社の近くにあつて、朝八時から夕方五時までです。職場で、子どもが幼稚園にいる人が、六時終了なのに五時に帰っても、みんな何も言いません。それは規則にない規則です。子どもの出迎えはほとんど男の人がやります。夕食の買い物とか、食事の支度とか片付けとかは、ほとんど女性がします。

これは都会の話で、農村と都会を比べると農村ではまだ差別があります。雑誌とか読むとびっくりするほどです。田舎では舅姑が孫に男の子を欲しがります。農村はまだ機械化されていないから、男の子だと体力があるから安心する。だから二人目でも三人目でも男の子が生まれるまで産まなければならぬ。政府としては一人しか産ませない。しかし現実の問題として女の子ばかりでは労働力が足りない。二人目を産むと罰金を取られます。それでみんな罰金を貯金して二人目を産みます。女性自身が欲しいのではなく、家庭からの圧力です。田舎の女性はお産してすぐ働くから大変です。

中国女性の理想

中国の女性の生活と理想ですが、どこの国の女性も理想があると思います。まず夫に対してどういう理想があるか。中国はほとんど恋愛結婚で、大学の四年のときは恋愛する人が多いです。卒業



が二三歳、結婚適齢期は二三歳ですから、卒業して一年恋愛して結婚するとちょうどいいです。

見合い結婚は少ないけれどもあります。十五年前は給料が多いことより、共産黨員、思想が正しくて人柄がいいことが第一でした。人柄がいい人とは、おばあさんが転べばすぐ助け起こすような人です。そんな人でなければなりませんでした。

十五年経つと、経済社会になりました。アメリカの問題は十年後に日本にコピーされるといいますが、私は日本の家庭問題は十年後に中国にコピーされると思っています。中国の女性もまず夫に高収入を求めます。中国の若い女性にどんな夫を求めるか聞くと「収入が高くて、安定した生活ができること」。思想が正しいかどうかは、「私さえ大事にしてくれればいい」。そういう考えになりました。収入が高くて、家があつて、姑と一緒に住まないこと、これが条件です。

結婚してからは、夫の条件として「三十而立」という言葉があります。三十歳になると事業を立てなければならぬ。その時成功していなければ駄目です。日本でいうと、少なくとも課長でなければ「この人は駄目だな」と思われます。私たち三十代四十代の夫婦の女性は、何をやっても成功しない夫に対して自信を無くしています。会社では、課長にならない夫を「上司と関係が悪いから」と言いわけをしないと恥ずかしいという状態です。

改革開放路線の中で

改革開放政策にしたがつて「下海（シャハイ）」という言葉ができました。つまり海に飛び込む。個人で商売もできるようになりましたから、公務員をやめて商売に飛び込む。それは勇気がなければ



ばできません。公務員は、死ぬまで住宅、医療費全部を国が持ちます。辞めるとそれがなくなりま
すから、成功しないと家族の生活はどうなるか。勇気がない人はやはり、安定した生活を求めます。
海に飛び込んだ人は、成功した人も失敗した人もいます。まず会社の住宅を返さなければならな
いから、家族で実家に行つて「泊めてください」と頼んで、自分は貯金を全部下ろして友達と会社を
興します。成功するかどうかわかりません。成功した人は家を買います。自動車を買う人はまだ少
ないです。奥さんはいい着物を買つて、好きな食べ物を子どもに買う。表面からみてもわかります。
会社によつては籍を残してもらつて、駄目になったら元の会社に戻るができます。その間は
給料はありません。

国内で商売をする人も、外国に行く人もいます。日本は近いからもちろん、あとアメリカやヨー
ロッパ。二十代で外国に行く人は留学です。資本主義国に行くと自由に能力が発揮できます。

勇気がない人は公務員で毎日のんきに暮らします。奥さんにいいものは着せなくても、寒くない
程度に着せます。公務員をやめるときは夫婦で相談します。女性が活躍している人は「やめましょ
う」と、すすめる人もいます。「このままの生活でいいです」という人もいます。

日本では定年の後、厚生年金があると聞いて「いいなあ、会社から年金をもらつて」と思いまし
たが、それは若いとき自分で貯金したもののですね。政府からもらうと思いましたが。

中国の退職制度は三十年以上働くと、給料を全額もらいます。女性は五五歳、男性は六十歳で退
職です。退職したら公務員は給料の全額をもらいます。医療費はただです。でも月給は給料の半分
しかありません。あといろいろプラスされます。日本は逆に月給からいろいろ引かれますね。中国
でプラスされるのは、まず生活補助費、健康補助費、利益が上がったら毎月ボーナスが出ます。全



収入の中で月給は半分です。中国は、公務員で男女とも七百元から八百元です。日本円で約一万円です。毎月のように物価も上がっていますが、生活レベルも上がっています。

五年前から中国でも高収入の人に所得税が始まりました。八百元を超える人は一五パーセントです。これは給料から自動的に落とされます。自分で税務署に行って払うことはありません。

中国の女性の悩み

三番目の、中国の女性の悩みですが、社会的地位は変わりましたが、悩みもあります。四十代の仲間と旧正月に会食をしたのですが、けっこう離婚した人がいます。最近流行っている言葉に「四十代の家庭は資本主義の経済危機」というのがあります。なぜかというと、十五年目の結婚記念日を越えたら安全です。三十代の男は仕事で忙しい時です。一般の公務員はいいのですが。

男性の間の言葉で「私はビキニだ」というのがあります。会社、幼稚園かスーパー、家、毎日三角コースだけでどこにも行かない。「三点一線」といいます。中国の男は夜お酒を飲む習慣がなかったのですが、開放政策にしたがって、夜飲みながら食べたり、その後カラオケにいったりが流行っています。公務員は別の収入がないから、そういう人はほとんど個人企業の社長です。

二十代の人は新婚で毎晩一緒に食事しますが、三十代になると自分の事業のために交際をします。お金は使わないと入ってこない。そういう社会現象につれて、家庭の危険な時代もあります。三十、四十代の男は、毎晩、付き合いで遅く帰ってきます。夕食を一緒にとらなくなって、夫婦の交流が少なくなつて、お互いに何を考えているかわからなくなつて、心が離れていつてしまします。



十五年前は、離婚したら会社で半年くらい話題になったのに、今は「まだ離婚していないですか」と、冗談みたいにあいさつしています。夫は夜遅く、家庭のことは何もしない。妻は「疲れてるから手伝ってよ」と文句を言います。そんな時夫は「じゃ、あなたが仕事をやめなさい。給料は僕が三倍も四倍もあるからやめなさい」と言います。

午前中、美容院やデパートに三十代の女性が多いのです。それはご主人が商売やっていて、仕事をやめた人です。最初は女性も喜んでいきます。でも会社の人にとつてそれは褒められることではありません。「仕事をやめたら精神的には貧しくなるのでは」と思われます。でも本人は「毎朝通勤電車に乗らなくて、ゆっくり寝られて、子どもが学校に行ったら好きなことができる」と喜んでいきます。でも知らないうちに、毎日うちにいるとだんだん夫と離れていきます。

最近、社会では社長になった男の人は会社で秘書が付きます。高級レストランで社長らしい人には、必ず側に若い女性がカバンと携帯電話を持っています。それは秘書です。

奥さんは四十代になって、子どもにはいい服を着せますが、自分は二の次にして構いません。そのうちに夫も奥さんより秘書がよくなつてきます。よくレストランで、「奥さんは？」と訊かれて「うちの家内は出られません」と言っています。本当に三十、四十代は危険な時代です。収入が多くなつていい生活になるほど、家庭は不安定になります。それは必ずついてまわる結果です。

また外国に行くのがブームになっています。男も女も外国で自分の道を探します。夫婦が長い間離れていると考えが通じなくなつて、最後には別れてしまいます。夫婦二人で外国に行つても、国内にいるのと考えが違ってきます。この危険な時代を越えて五十代になると、夫婦喧嘩する力もありません。そろそろ子どもも大きくなつて、家を内装工事してきれいにするのが理想になります。



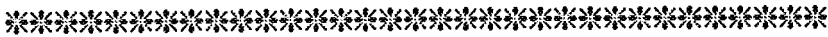
建築会社も悪くなって粗末な工事ですが、家をきれいにして喧嘩もしないで暮らします。中国もインフレで、景気の悪い企業は女性は早めに定年にしてもいいです。本当は五十五歳ですが、五十歳で辞めてもいいです。ただし金額は出ないで七〇パーセント給付です。

忘れられない過去の戦争の記憶

最後に日中関係を話します。学校でも勉強なさったと思いますが、一九七二年に日中国交回復して、七六年に日中平和友好条約が結ばれました。中国と日本の国民は戦争の酷さをよくわかったから、両国民の希望です。今でもだれも戦争のことは思い出したくないのです。

南京大虐殺はよく知っていると思います。日中戦争が始まった盧溝橋に博物館があつて歴史の事が記録されています。国交回復したときも、国民、特に老人たちは国交回復に反対しました。どうして日本と友好関係を作るのかと。「昔の軍国主義者と友好関係を作るのではなく、これからの日本と作るのだ」と言っても、老人はすぐ戦争のことを思い出すのです。

私は小沢征爾が訪中したときについていたことがあります。彼は戦争時代、瀋陽にいたのですが、その時乳をもらったおばあさんに会いに行つて、抱き合つて涙を流しました。日本からテレビや電気製品を買つてきてあげました。そのおばあさんは日本人を恨むことはありませんでした。言葉が通じないだけで、同じ人間です。そういう人もいます。しかし、満州には家族を日本人に殺された人で、日本人のことを言うとき涙を流す人もいます。昔私の祖父母は東北にいたのですが、日本の警察で、一番ひどいのが満州、次が南京、上海だと言います。



八〇年代に入ると、どこの国にもいい人も悪い人もいるという一般認識ができました。日本の映画が中国でも上映されますが、それを見ると、日本でも命令が来たら行かなければならない。日本国民も同じくらいひどい目にあったとわかりました。周恩来首相がなぜ賠償はいらないといったのか、四五億元（日本円で五兆円以上）の賠償だそうですが、みんなわかりませんでした。周恩来首相は一番評判のいい首相ですが、その点だけはみんな理解できませんでした。

「いま日本はこんなに発達して、中国は貧乏なのに。あの時四十五億元あったら、日本より発展していたのに」と、若い人はよく不満を言っていたのです。首相の話では「賠償をもらっても、軍国主義者からもうけわけではない。日本の国民の税金からもうけうことになる。中国国民も日本国民も戦争でひどい目にあった。日本の労働者がまた税金を取られるのはたいへんだ。それよりも、日本に、決して軍国主義にならないことを約束してもらおう」と。

中国は偉大な革命の祖といわれます。だからいりません。中国は貧困から自力で立ち上がります。今年はずうど戦後五十年です。でも中国は日本より三十年遅れています。前には十年遅れていました。文革があり、天安門事件があり、三十年遅れました。日本は進んでいますから、昔の軍国主義者はいないでしょう。天皇陛下も訪申しました。中国でもあの時のおじいさんおばあさんはいないです。若い人は、日本の若い人と互いに「あなたは悪い人だ」と言い合うという考えは持っています。政府としてもそのように教育しました。

娘がかつて日本に来て小学四年生に入ったとき、子ども同士で「中国人は遅れている、日本人は進んでいる」、そういうイメージはありませんでした。しかし六年になるとテレビで密入国者が来



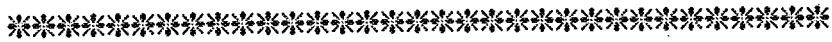
たニュースがありました。学校に行くといひ子に「中国は貧乏な国だ」と言われて、その学期が終わるとどうしても帰国したがりました。そういう差別があると、もう十二歳ですと心理的には自我ができていて、嫌がりました。

中国に帰ると作文で「日本のおじいさんおばあさんは優しい人たちです。礼儀正しくていい国でした。ただ、どうして子どもは中国は貧乏な国だと言いますか」と書きました。中国の子どもたちは「えっ、中国は貧乏な国ですか」と、理解できない。「日本はどこが進んでいるの」「さあ、飴玉が多いみたい」「洋服はどうですか」「洋服は同じです。エンピツなんか多いみたい」

もともとは差別はありません。私たちの時代は、歴史のことはおいて、昔は昔で、これからのことを見なければなりません。ただ、中国から来て悪いことをする人もいます。中国にもいい人、悪い人がいます。日本に来て法律違反をしている人も結構います。社会問題になっている人もいます。

日本来ると、日本の主婦に似てくる

中国から夫婦で日本来ると、夫婦共働きだった人が、主婦になります。家族滞在ビザを初めて見て、「へー、私はこれから家族になってしまった」と言いました。中国の女性はそういうことに慣れていません。日本に来て初めて中国と違うことがわかります。男が働いて、女は家で掃除洗濯をして、日本の真似をします。最初は好奇心や新鮮感からうまくいきます。しかし、中国女性は共働きに慣れているから、自分の家の掃除をそんなにすることもないと、アルバイトを始めるのです。自分のご主人はだんだん出世して、海外の出張も多くなりますから、夫と気持ちが離れてきます。



夫は帰ってきて会社のことを話してくれません。「お前に何を言っても、わからないよ」と、お互いに離れ離れになってきます。それでアルバイトを始めるのですが、主婦のアルバイトは午前中だけとか数時間です。子どもは学校ですぐ友達ができるし、夫は会社だし、アルバイトするときは時間給で、中国のようにお喋りしながら働くことはできません。うちに帰ってもテレビを見るだけで寂しいです。夫は出張したり、夜、飲むようになったり、子どもは塾に行き始めて、母親と話題がなくなります。自分が朝から夜まで家にいて、はじめて日本の主婦の悩みがわかりました。デパートに行っても、美容院に行っても、楽しくない。昔はそれにあこがれていたのですが、今は精神的に寂しいのは、物質的な貧しさより苦しいとわかりました。

私の友人にも二人そういう女性がいて、一緒に銀座を歩きながら「自分の世界を探すしかない。もう夫を頼りにできない。夫は外で何をしているのか。会社は六時に終わって、食べたり飲んだりしても九時には終わるはずだ。でも、もう考えるのはよそう」と言いました。

日本に来て何年か経つと慣れてきます。家庭にだけ対して責任を持てばいいのです。最初、日本に来たときは不思議でした。中国では自分の夫が他の女性と食事をするのは絶対駄目です。帰ってちゃんと謝らなかつたら「外で一晩立ってなさい」(笑)。

日本に来てから今、やっとわかりました。それまでは小説で読んで、日本の女性が「夫が外で女性と食事しても、カラオケに行っても、お酒を飲んでも、夜ちゃんと帰ってきて日曜に家族サービスすればいい。毎晩帰ってきたら、食事の準備がかえって大変だ」と言うのが、不思議でした。考えられませんでした。日本に来てからやっとわかりました。帰ってきたら「もう寝るよ」。朝御飯を一生懸命作っても食べずに行く。在日の中国女性にそういう悩みが出てきました。



友達は、もう中国に帰りたくて仕方がない。悩みを話す人がいない。日本女性に話しても、もつと悩んでいる。それで冗談に「男の対策研究会を作りましょう」(笑)。

日本の社会に来たら、日本女性の問題は外国人の女性にも出てきます。そういうことです。

司会 身につまされたようにうなずいておられる方が大勢いらつしやいましたね(笑)。では今度は張さんに、お話を伺いましょう。張さんは『科技日報』という中国の科学関係の新聞社の東京支局に勤めておられるジャーナリストです。張さんについては、森下さんにご紹介いただきます。

広い中国の多様な生活 ——五十代の女性の目から

張 晶

森下久美子 張さんは五年前、天安門事件があった二、三か月前、私のいる科学技術政策研究所というところに、STA(科学技術庁)のフェローシップ制度で二年間研究に來られた方です。年齢的に私が一番近かったので、仲良くなり、婦人問題に関していろいろお話をしました。役所は固定的な男女役割分担が一番残っている職場なので、彼女は理解できないことがたくさんあったのです。

張さんには国内の婦人団体の集会等に参加して、日本の女性の現状を理解してもらいました。張さんは、研究においても「戦後日中科学技術発展状況比較研究」という素晴らしい研究成果を残しました。外国から来られた研究者は必ず彼女のそのレポートを読みます。その後、今度は科学ジャーナリストとして来日されました。いま任さんから中国の話を聞きましたが、その通りと思われること、ちよつと違うと思われることなど、張さんにいろいろと話をしていただきたいと思います。

張 仕事として科学の研究をやっていますから、「外国人の日本語」ですが、我慢してください。

私が一つ話したいのは、さつき任さんの話を聞いて同感するところが多いのですが、ちよつと気をつけてもらいたいのは、中国はものすごく大きく、各地の格差が著しいことです。皆さんが想像できないくらい、地方によつて、分野によつて、都会と農村によつて、だいぶ違います。

中国人は何が好きとか、何を食べるかと訊かれて簡単に答えたら、実際に中国に行ったら全く違ふかもしれない。と言うのは中国は大変大きい。山東省だけで日本と面積が同じ、人口も同じです。そのくらい大きい国で、民族も違います。任さんや私が話すことは、自分で見たこと、感じたこと、経験したことで、二人は北京のほうはわりと知っています。農村には行ったことが少ない。南のほうも行ったことがない。もし皆さんが中国に行かれたら、たくさんの方が私たちの話と違ふと思います。年齢によつても違います。私の息子は大学を卒業して一年勤めて、いま東大の大学院に入つて二年になりました。私は任さんより少なくとも十年以上年上になりますから、今の若い人と、年取つた人の真ん中の概念だと思っています。

私と主人は五十代です。五十代の方は、若い時は大学で恋愛結婚して、男女一緒に家庭を運営し

ています。例えば大学の若い先生の社宅でしたら、台所は共同で、それぞれの家庭が一緒に食事をしています。勤め先から帰ってから同僚と同じ台所で働いています。見ていると男が主としてやっています。私の主人は私よりじょうずにご飯を作ります。

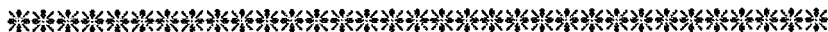
任さんが言ったように、だんだん国が豊かになるほど、先進国のいろいろなことをコピーするようになりました。十数年の間に中国は急激に発展してきました。その発展の過程でいいこともたくさんありました。残念なこと、悪いことも、必ずあると思います。

中国も日本の今までの田舎のような人間関係が変化してきました。昔の人間関係のいいところは少なくなつて、拝金主義が著しくなつて、経済発展の反面を現しています。鄧小平の改革開放ということは、自分の家に新しい空気を入れようと窓を開けたら、新鮮な空気と共に蠅が入るかもしれないということです。蠅とは資本主義の悪い影響です。しかし一つ二つの蠅のために窓を閉めるのではなく、入ってから気をつけて中国国民を教育することはやるはずで、改革開放をしてから十年十五年で、今までの百年より速く発展していることは良かったと思います。

後退した男女平等

けれども婦人問題に関しては、皆さん多分残念がるかもしれませんが、例えば私が一番自慢しているのは中国の男女平等、ある程度女性が強いということです。このところ、入社するとき、大学の試験のとき、農村の女子が学校に入るとき、男女格差が見られるようになりました。

大学は、明文化されていないけれど、ほとんど決まっているかのように、同じ大学に入るなら、



女子学生は十点ほど高い点を取らなければなりません。女子学生は点数のいい人がたくさんいます。でもどんな大学も男の学生が欲しい。卒業してから職探しをするとき、どの会社でも男の社員が欲しい。同じレベルの高校でも十点ほど高くしなければならぬ。私が入学するときもそういう状態でした。入社するときは、条件がすべて同じなら男性が入る。婦女聯でも大変文句を言って、書類を書いて議会で議論して婦人保護の法律を出しました。問題がある以上、第四回世界大会のとき、中国女性はそのチャンスを利用して中国政府に強く要求して不合理な現象を消滅させるように要求するでしょう。このような現象は始まったばかりだからちよつと注意すれば直せるかも知れません。

一般的に私たちの時代は、昇進する時、二人の条件が同じなら何の区別もなしに昇進させることができました。優秀な人が多い部門なら、女性は半分以上重要な仕事をしています。私の知っている限りでは、中国技術輸出入公司、つまり日本の通産省、外国人との商談をやっている重要な部門は、課長以上は八〇パーセント以上女性です。それに研究所の所長、大学の先生、いろいろな重要な職場に女性がいっぱいいます。

たしかに中国の女性は苦しみをいとわず頑張ってきました。優秀な人は多いです。だから政府の首相以下の人は相当な重要な地位を女性が占めています。

家庭の場合を話しますと、家庭によって違います。私は兄弟三人ですが、私と妹は主人のほうが家庭で強い。しかし、弟の家はお嫁さんが強いです。不平等とは言えない。能力と興味の問題です。テレビで料理をやっているとき、たくさんの男が興味深く見えています。料理の本を台所に飾って、本を見ながら料理している男性もよく見ます。それで軽蔑されるということではなく、それぞれの人の興味によって違うことです。

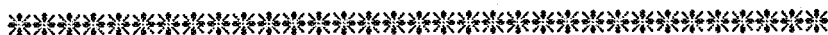
また感じたことは、中国は老人を尊敬する習慣を守っています。それは今も続いている優れたことといえます。十年後はそれが悪いという価値観になるかも知れませんが。

大家族は相当崩壊していますが、小家族でも老人は大切にしています。

もちろん拝金主義の中で一部の人はそうではないかもしれませんが、孔子の伝統か、国民の伝統か、ある程度日本人よりは老人を大事にしています。私の両親は、私も羨ましいと思いますが、兄弟三人が争って配慮しています。もし弟がテレビを買ってあげたら、私はもっといいものを買ってあげなければならぬ。争って大事にします。ある場合は三人、五人の子どもの間をまわって住んでいます。三か月はここ、三か月はあちらというふうに。そんなときは争って自分のところに呼んで、自分もつとよく面倒を見ます。

「模範丈夫」という言葉が中国にあります。老人を大切にし奥さんを愛する人、そういう人は近所で尊敬されています。だから模範丈夫——丈夫とは中国で主人のことです——は、集団台所で料理をすると、料理がうまくて、奥さんの面倒をよく見たら、模範丈夫と呼ばれます。逆に家庭を軽視したら軽蔑されます。老人に対する配慮も、老人の面倒をいろいろみたら近所の人は褒めます。こういう社会の世論のもとに老人は幸せだと思います。今、定年になったら、百パーセント給料を死ぬまでもらって、医療費も百パーセント政府が出します。

今から見ると、それが社会主義のいいところか悪いところか言いにくいけれど、社会主義とはそういうもので、社会の負担は重いので経済発展に影響があります。けれども、それがなくなったら老人は老後の問題に悩まされるでしょう。だからどううまく対応して解決するか、それが問題です。



中国に今も残る温かな習慣

任（会場の男性に）男性一人でこういう話を聞くと、怖いでしょうね（笑）。中国の模範丈夫の三つの条件は、料理が上手、洗濯は積極的に、子守は優先です（笑）。日本の男が中国に行ったら大変ですね。

日本の各界から、政府も企業も訪中団が来ますが、その通訳の仕事をしていた頃、私が仕事で家にいない日は年間二百日でした。ある婦人幹部が結婚して四年目に子どもを産みました。もう産まないと三十歳ですから。産児制限は婦女聯の担当で、子どもを遅く産んだ人は褒められます。「よく産児制限をしましたね」と。「いや、夫婦別居だから」と言いました（笑）。

訪中団の通訳をしていた七〇年代は、中小企業の社長とか、政府の役人とか、男が多かったのです。その時に日本のことをよく聞きましたが、「女性は楽ですよ。朝、見送りに出たらコーヒー飲んで、デパートに行つて、美容院に行つて終わりですよ。だんなが帰る時間がわかつてるから、その十分前に帰つて玄関で迎えればいいんですよ。社会的地位が高いとか低いとかないですね。家庭にいて仕事に行かないから、男の人が外で苦労しても会社で悩みがあつても知らないし、給料は全部取られて、最近は振り込みになつて奥さんから小遣いをもらいます」。日本男性からそういう話ばかり聞いて私は、「日本の女性は楽ですね。給料は全部握つて、逆に小遣いをあげて、家事も全自動洗濯機などで何もすることはなくて、好きなことをして」と、私は日本の実情を知らないまま、そう思っていました。しかし、日本に来てみると、たしかにデパートは朝から子ども連れの主婦が



多いですが、二、三年目から日本の主婦は生活は豊かでも精神的には貧しいことがわかりました。

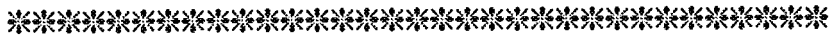
私の友達が「夫が稼ぐから、私は仕事をやめて主婦になります」と言うのを聞くと、「それは絶対やめなさい。後で苦しいですよ」と、私は日本の女性のことを話します。

でも日本の社会も時代につれて変わってきましたね。女性がスーツ着て働いている姿は中国の女性のようです。この前は女性の社長に会いました。女性も男性の会社の苦勞を理解して、男性も奥さんの寂しさを理解すれば問題ないですね。ただ難しいことです。

今の日本の婦人問題は何ですか。私たちは女性解放、男女平等、そういうのが婦人問題です。社会主義国では昔はよく言いましたが、日本の婦人問題は一体何ですか。中国でも婦人問題をあまり言わなくなりました。兄の奥さんが婦女聯に勤めていました。よく冗談に「婦人幹部は？」「今日は残業です」「では、解放されましたね」(笑) などと言いました。婦女聯に勤めている人は厳しいのです(笑)。

今の時代になると、婦人問題は何でしょう。平等は平等です。解放と言っても、どこから解放しますか。「日本の女性は寂しい」、これは現実です。これを解決する方法は、自分で自分を解放するしかありません。家から出て、社会に出て仕事をして、人との付き合いがあつて、日本の男に世間知らずと言わせない、それしかありません。家にばかりいて、見るものが少ないから考え方が狭くなります。自分で充実できることを探すが、自分を解放することだと思います。

私が理解できない二つの事は、一つは日本の老人が一人で暮らしていることです。中国では考えられないことです。一人で暮らしている人は、子どもが皆死んだと思われれます。ほとんど長男と、最近はお孫さんも暮らす人も多いです。「一人っ子なら男の子を」と言っていたのが最近はお孫さんが



い。年取ったら娘と暮らすほうがいい」と、言っています。日本では老人ホームが多いです。中国では子どもと住んで、病気になったら最後まで病院に付き添います。ホームに預けるのは考えられません。でも、日本には日本の現実がありますから。一時間働いたらお金になるけど、一時間看病してもただ働きです。資本主義国では「時は金なり」だと痛感しました。

もう一つは電車やバスに乗りますと、中国では妊婦や赤ちゃんを抱いた女性、年寄りがあると必ず席を譲ります。そうしないと咄られます。日本では年寄りにも譲りません。サラリーマンも新聞を読んでいて平気です。日本の方に訊いたことがあります。男性が何と答えたと思いますか。「外に出かける体力があれば立つべきです。体力がなければうちから出ないでください」(笑)。中国の友達に話したら「それも合理的ね」(笑)。それぞれの国に、それぞれの習慣があるとは思いますが。

司会 鋭いご指摘ですね。ところで日本の婦人問題は何か、という質問がありました。どなたか答えてください。

野村三枝子 日本は戦争に負けて何もなかったのです。そこから立ち上がるには、洋服は一枚だけ、道に生えている雑草を食べ、人形の顔をつくる粉まで食べて生き延びてきました。女性問題など関係なく、必死に生きてきました。がむしろに働いてやっとここまできました。男が外で働いて、女がうちを守る、それが一番効率が高かったのです。今でこそ「私たちは賃金をもらわなくても働いていたのだ」と意識できるようになりましたが。



日本の奥さんはヒマだといいますが、いろんな人がいて多様性を持っています。お金のほしい人は働き、勉強したい人は勉強し、カラオケをやりたい人はカラオケをやります。

ただ大学に女性が入れるようになるまで、女性の官立大学はなかったのです。戦後それが改められて、男女同じ大学で教育を受けることができるようになりました。ところが就職する段階で、やはり男社会だったわけです。そこに一つ問題があります。同じ能力があっても就職でハンディがあり、大半の人があきらめて専業主婦になりました。

その状態が根強く続いていて、大半の企業に女性重役はいません。完全な男性社会です。教育があっても職が与えられず、能力が埋もれてしまいました。

国連のデータにあります。『日本女性は最も長寿である。教育もある。好きな物も買える。ところが社会的地位においては非常に低い』。日本の幸福指数は一位と高い。ところが女性の地位を勘案すると十七位に転落して、先進国の中では、最も女性の力が無駄にされている国です。国会議員の数は世界の百十位くらいです。ですから、女性は鬱屈して、能力を無駄にして、ボランティア、無償労働に就いています。また、生協を作って自分たちの働く場を作っている女性もいます。ただ男社会を変えるのは本当に難しいことです。

森下 私は婦人問題は裏返せば男性問題だと思います。もう一つは多様な人生という選択が男性も女性もできてきてはいますが、基本にあるのは国家の基盤だと思います。国家の基盤を作る政治の意識が、今の婦人問題とイコールではないかと思っています。

女は適当にやっていると言われたら、私もそうで、年休を取ってここに来ているわけです。男性もそのくらいのゆとりがあってほしいと思います。職場で男性と言いつつ合ったことがあります。男性



のような仕事を与えられなくて文句を言ったのです。そしたら「俺たちと同じように遅くまで残れるか」「やろうと思えばできますよ」と。だけど男性の働く過酷さと、女性の仕事の楽さだったら、足して二で割るような生活を選べばいいのです。男性は給料を三分の二にしてその分の仕事を女性によこせばいいと言ったのですが、「今の給料が減るのは嫌だ」と言うのですね。そこが問題です。

斎藤 たしかにそこが問題ですね。女性問題は、女固有の問題ではない、まさに男性問題でもある。人より多く稼ぐ人が優位に立つ。自分のすぐそばの人の痛みが見えない。日本人の権意識の貧しさですね。女だけでなく、「障害」者、老人、在日、部落……、すべてに共通する差別の構造を解消することこそ、ジェンダー問題の解決につながると思います。

そのことは、厳しい条件、厳しい差別のもとで働き続けることによって見えてくる。働く場がないとグチだけ言っている、決して事態は解決しないし、問題も見えてこないと思います。

くずめ 老人問題について。中国の方は本当に老人を大事にする。しかし人口の構成の差も考えなければいけないと思います。一つは中国はまだ寿命が短いです。日本は寝たきりで、死なないわけです。中国は元気に生きているか死ぬかですが。

任 七十歳で寝たきりの人、いますよ。

くずめ いても人数が違います。昔なら死ぬ人が助かるようになったのです。

張 蠅が集団発生して飛び込むかも知れない（笑）。蠅の方が多いかもしれない。

任 テレビで田中角栄がリクルート事件で有罪になったと言っていました。中国では考えられないことです。中国では「政治家は偉大」です（笑）。

張 阪神大地震のことですが、中国の唐山大地震の震源地を調査したことがあります。今回の地震に私たちマスコミは、毎日調査研究の原稿を書いて中国に送っています。唐山と阪神両方を比べて見たら、両国のいいところ、悪いところがよくわかります。

日本国民は皆落ち着いて、その後のシステムも中国よりうまくやっています。けれども先進国ほど自分を助ける能力がなくなっている感じがします。中国では生きている人がすぐ思い出したのは、他の人を救済することです。生きている人は、人に頼らず自分の手で仮家屋を作って、食べ物を作る。中国は立ち遅れている国だから自力でやらなければならない。阪神の人は麻痺したように、政府やボランティアの人を待っているだけです。協力したらあんなに火も燃え続かなかったのではないでしょう。日本だけでなく先進国ほど人間の生命力、協力精神は少なくなった感じがします。

子どものいじめも社会の問題です。教育が点数だけを目標とするシステム、社会の互いの信頼の薄さ、それが根本の原因です。

司会 いろいろありがとうございました。お互いに話したいことが山ほど出たところで残念ですが時間になりました。この講座は、本当は今日で終わる予定でしたが、来月、もう一回延長します。また中国の方からお話を伺います。ぜひ、おいでください。

（一九九五年二月二日）

私の歩んだ道——そして今

袁 晞

司会（綿津靖子） 袁さんは武漢の大学教授として、若い中国の方々に日本語を教え続けてこられた方です。これまで、中国全国婦女聯合会の張静さん、盧亜民さん、また民間人の任さん、張晶さんのお話を伺いましたが、最終回のきょうは、この方々の母親くらいの年齢の袁さんのお話を伺います。解放前の中国から現在の中国までたくさん経験を重ねて来られたので、若い方々とはまたひと味ちがったお話をうかがえると思います。

戦争で一変した平和な暮らし

私は武漢（昔の漢口）から参りました袁晞と申します。どうぞよろしくお願い致します。私はずっと前から斎藤さんに「あごろ」を送っていたので、拝読するたびに日本の女性がフェミニズムの先頭に立って、不戦、不差別、不暴力を目指しての健闘ぶりに敬服しておりました。できれば「あごろ」の皆さんの仲間に入って微力を尽くしたいと思っていましたが、はからずもその願いが

叶って望外の喜びです。でも年もとったし、女性運動の経験もないので、お役に立つかどうか心配しておりますが、皆さんと一緒にできるだけ努力致します。

斎藤さんから、「北京会議への道」という講座で戦争をはさんでの苦勞を話してほしいと、お話がありました。が、正直なところ、自分の昔のことを思い出したくないです。あの辛酸をなめつくした過去のことを忘れようとしてきたのです。でも斎藤さんに頼まれた以上、私にとつては苦しいことですが、お話ししましょう。しかし思い出してもなかなかまとまらなく、日本語も思うように話せないのです、お聞き苦しいところもあるかと思ひます。どうか悪しからずお願いいたします。

*

私の祖母は日本人で、中国の男性と結婚しました。父は生まれも育ちも日本で、日本の大学を卒業してから帰国し、漢口にある日綿会社の日信洋行に勤めました。一家は平穩に日を過ごし、私は祖母にかわいがられ、少女時代は幸せでした。当時、漢口には日本の居留民が大勢いました。祖母の友達が遊びに来る度に、祖母は上機嫌でした。

ところが、日中戦争が勃発して、日本居留民は個人経営の店も財産も家屋も全部捨てて、日本に引き揚げました。みんなが祖母に別れを告げに来た後、祖母は悲しかったようです。いつも陽気な祖母は、その後、陰気になって、一年後に亡くなりました。

そのうち抗日戦争が広がって、学校もデモを行なつて、抗議集会を開き、憤りと熱に満ちた講演、声高らかに叫ぶスローガンをきいて、私は優しい祖母や自分の接した日本人がよい人だったのに、どうして日本帝国主義が侵略に来るのかと、子ども心にわからなかつたです。

戦争は生命財産を壊滅することです。それから間もなく日本軍の爆撃が始まりました。家屋は倒

毆ったり蹴ったりしていました。そのそばに頭を垂れてひざまずいている人が何人かいました。父が証明書を出して日本語を話したら、私一家は無事に通れました。あとでわかったのですが、ていねいにお辞儀をして良民証を出したら通してくれるけれども、お辞儀をしなかったら酷い目に合わされるのです。中国人は日本人のように深々とお辞儀をする風習はありません。清朝が倒れてからは、平民が役人にお辞儀をすることもなく、授業の時だけ、生徒が先生にお辞儀をするのです。解放後は授業の時もただ起立するだけで、お辞儀もしません。普段あいさつする場合は会釈するだけで、ていねいな場合は握手をするのです。当時、知り合いの家柄のある人が、向こうから来る日本の兵士にお辞儀をしなかったためひどく殴られて、家へ帰って憤りのあまり、まもなく病死しました。

その後、日本から各階層の人が続々と家族連れで武漢にやって来ました。武漢は前より一層繁華になったようです。当時銀行で働いていた我が家は、比較的物資に恵まれていましたが、たまたま家に親友が来て塩をもらって帰るのを見てそのわけを聞いたら、一般の市民に対して制限があることがわかりました。中国人は漬物が好きなので、配給の塩では足りないのです。大東亜共栄圏としたいながら対等に見ていなかったのです。広汎な民衆は不自由な生活をしているのではないかと思いました。

余談ですが、解放後、東北人である同僚から聞いた話ですが、かつての満州国では一般の国民は高粱米しか食べられませんでした。農民は自分の手で作った白米は全部納入しなければなりません。お正月のためにこっそり少し取っておいて、見つけれたら、殴られたり、投獄されたりしました。考えられないことです。

一九四〇年、私は南京政府の公費留学生試験に合格して九月に来日し、四一年に日本女子大に入り、四二年に東京女高師（現在の御茶の水女子大）に入り直して日本文学を専攻しましたが、戦火が激しくなり、日本人の皆さんは工場に動員されましたので四五年度の二月に中国に帰りました。

戦争の惨禍を越えて

戦争は日本国民にも不幸と災難を与えました。私が東京留学の初めての一年間は生活がよかったです。物価も中国より安いし、物資も豊かでした。しかし、アメリカと戦争して一年後、食物がだんだん少なくなり、配給制になったら、おなか一杯食べられなくて辛かったです。その後、東京も空襲でたいへんだったそうです。「おしん」のドラマの中でその場面を見ました。戦争のため、日本の国民もずいぶん苦しめられたことがわかりました。

私は帰国の途中から苦勞の連続でした。関釜連絡船の中で、魚雷にぶつかる恐れがあると聞いてビクビクしました。その後、天津から南京へ行く途中空襲にあつて、鉄道がこわれて徐州という小さな町にとどめられました。漢口の家へ電報を打つたけれど返信がない。知る人もなく、土地にもうとい徐州で汽車を待つうちにお金もなくなり、途方に暮れましたところに見知らぬ男の策略にかつて、不幸な家庭を持つようになりました。

戦火の中にあちこちをさすらい、やっと職についたら病氣のため辞めさせられました。何年間も貧困と病弱に迫られる暮らしの中で一九四九年、解放を迎えました。

解放は私の人生の道路においての転換点といえましょう。

新中国の法律は婦人の權益を保障するということを聞いて私は思い切つて一九五一年に夫と離婚しました。法律上、子どもは母が育てる権利があり、私の姓にしました。新聞の尋ね人の広告で漢口の親と連絡がつき、三人の子どもを連れて十年振りにふるさとの我が家に帰りました。

その時、私は三十歳でした。これから新しい生活の道を踏み出していこうと希望に満ちていたのですが、運命の定めか、やはり苦勞に満ちた道程でした。母に子どもを見てもらい、就職して、父と二人の月給で一家の生活を維持して楽しく暮らそうという望みを抱いて帰りましたが、父も年をとって、母は長年の苦勞で家事もできないほどの全身衰弱になっていました。家にまだ中学校に通っている妹が二人いました。合わせて八人家族の家事を私一人でやるのですからたいへんな苦勞でした。

一年後母が亡くなりましたが、当時、私の三番目の女の子は二歳でした。幼い三人の子を抱えて就職もできず困つているところに北京の映画学院に勤めている弟から手紙が来て、学院長に話したら採用してくれる上に、子どもも学院内の保育園に入れてくれるとのことでした。困窮に陥つた私は助けられた喜びで、一週間後、子どもを連れて三十時間の汽車に揺られて北京に着いたら、事情が一変していました。党中央が機構の調整簡素化の措置を提出したので新しく採用することはできなくなつたのです。でもありがたいことに学院長は瀋陽（昔の奉天）の東北文化部長に紹介状を書いて、そちらには知識人が少ないのできつと就職できると言ってくれました。生計を立てるためにはるばる遠い東北の都市瀋陽に行つて就職するよりほかありませんでしたが、数々の困難にぶつかりました。

最初の職場は瀋陽市故宮陳列所、清の太祖ヌルハチの皇居で説明員をさせられました。嚴寒の冬、

農村の下放も経験

武漢に帰った一九五七年は政治運動のさなかでした。その後、プロ文革中、私は学校のグループで三年間も農村労働をされました。当時ははじめに毛主席の指示に従って一生涯農村で貧農と共に生活する覚悟でしたが、七〇年に学校に戻り、再び教鞭をとりました。七四年に武漢鋼鉄会社が日本の新日鉄からプラントを導入するため日本語クラスを作ることになったのをきっかけに、私は日本語を教える仕事に転職しました。

鄧小平路線のおかげで政治運動がなくなり、広汎な知人は穏やかな生活ができるようになりました。七六年に私は桂林冶金地質学院という大学に転職しました。大学の仕事は中学校よりずっと楽でした。中学校では二クラス、各六十余名の生徒に週十四時限の国語を教えるほか、学級担任で早朝から深夜まで忙しい日々でしたが、大学では週に六時限の初級日本語の授業以外、時間は自由です。朝、緑に囲まれたキャンパスの中で運動をしているうちに体が日に日に丈夫になりました。その間、何回か旅行社につとめている教え子に頼まれ、観光団の通訳をして、美しい桂林の山水を満喫した上に日本の友達も出来ました。就職以来桂林での三年間は最も楽な暮らしでした。今でも後悔しているのは当時老後のことを考え、心細くなつて、武漢鋼鉄学院に転任したことです。武漢は桂林より気候が悪く、美しい景色ありませんでした。八六年に停年を迎えました後も、よい機会があれば桂林に出掛けて翻訳や教師を勤めました。

今年は終戦五十年になります。あの憎らしい戦争時代を振り返えると感慨深く心を痛めます。戦

このほか都市では二、三年前から証券会社がたくさんできて、その取り引きで大もうけした人が多いようです。また、国家公務員や、学校の教職員などでもビジネスにとりくむ人が少なくありません。「下海」(シャハイ)という流行語ができました。ビジネスの海に飛び込むことを言います。もちろん腕や機運によつて大もうけする人もあるし損をする人もあります。解放後は個人所有の家屋は全部国家に没収されました。後に政策により本人に返還しましたが、新しく家屋を買うことはできませんし、自分で家を建てることもできませんが、今は商品住宅がたくさんできて、お金さえあれば誰でも買えます。豪華な住宅もあれば普通のもあります。中国の都市、例えば大都市でない桂林のような小さい町でも三つか四つ星くらいのホテルが十以上もあり、カラオケ、遊樂センター、高級レストランがたくさんあります。そして、レストランやホテルの前によく「早茶」という看板があります、それは「飲茶」(ヤムチャ)のことで、多くの市民は朝、ゆつたりとそこで値段の高い朝食をとります。

もう一つ日本では見られない朝の風景として、中国の都市では朝の五時から六時ごろから公園や静かな空地にたくさんの方がグループか個人で、気功、太極拳、剣舞などをやっています。私のいる大学のキャンパスも夜明けから、鍛錬の人々にぎわっています。

でも経済繁栄の一方に社会問題もいろいろ出て来ます。まずインフレです。物価がどんどん上がつて、不景気のため一部の中小企業の従業員は月給の全部をもらえないため、生活に困る人が出て、泥棒、強奪事件が前よりも多くなりました。またお金をもうけるため、不良商品、偽造品も多くなりました。政府は積極的に措置を取り、テレビの「焦占訪談」(クローズアップ)の番組に

公安部門でかたづけられた事件がよく出ます。

いま、計画経済から市場経済へ移行しつつある中国では、さまざまな格差が出てきました。社会の分配の不合理さが目だつほどです。従業員は職場や工場によって給料が違います。不景気のところは二百元以下、景気のいいところは千元、二千元以上ももらえます。私の二人の同僚の子は武漢の大工場で働いた時、月給は二百元か三百元くらいでしたが、二年前に深圳へ行って就職したら十倍以上の月給になり、年末に一万元くらいのボーナスをもらったそうです。

日本に来て、交通機関の便利さ、それに秩序が整然としていること、食品が衛生的でちゃんと製造日と賞味期限が書いてあること、水道の水はそのまま飲めること、米には砂一つも混じっていないなど、本当に暮らしが便利で衛生的なのに感心しましたが、中国ではこのような面ではまだ差があります。

女性の社会的進出は日本以上

次は中国の女性のことについて少しお話しします。解放後、わずか数年で、大規模な大衆運動を通して、政治、経済、文化、社会、家庭生活の各方面で女性には根本的な解放を獲得し、男子と平等の権利を享有することになりました。政治の面から言うと中国の女性は国家と社会実務の管理に全面的に参与し、各級人民代表大会（議会）の中で重要な位置を占めています。全国人民代表大会（日本の国会に当たる）常務委員会副委員長を担当した女性は前後八人いました。「婦人権益保障法」など多くの法律の制度はいずれも女性代表の提案と参与の下で実現したのです。一九九四年、国務

院各部・委員会には女性の部長と副部長が十六人おり、全国には女性の省長と副省長は十八人います。全国の五百七十七市の中で、三百余人の女性が市長や副市長に選ばれています。また司法機構には女性の裁判官、検察官、弁護士が大勢います。九二年、女性の裁判官が二万一千人に達していました。女性弁護士は千五百人もいました。

一方、政府は絶えず少数民族の婦人幹部を養成する訓練班を設けており、全国には少数民族の婦人幹部が六十万七千人います。しかし、少数民族の状態はまだ良好とは言えません。

教育事業の面では、女教師は教師総数の三〇ないし四四％を占めています。中国で一番有名な大学、北京大学は、三千人の教師のうち、三分の一が女性です。全国では、大学の学長、副学長を担任している女性は二四人、一九九〇年に全国で五万人の特級教師が選ばれました。このとき女教師は七〇パーセントを占めました。

また科学・技術の面で光工学、遺伝工学、マイクロエレクトロニクス、衛星打ち上げなどの先端科学技術にも女性が進出し、男性の科学者と共に成果を上げています。中国医科科学院の高級専門技術を持つ科学者の四〇パーセント以上が女性で、科学院の一二の重点研究テーマのうち、責任者が女性であるものが四七・三パーセントに達しています。

芸術界でも女性の進出はめざましいものがあります。中国文壇における女性作家群の出現は文学界に空前の繁栄をもたらしています。一九八八年までの間にバレエ、ヴァイオリン、ピアノ、声楽などの国際コンクールの女性優勝者は入賞者の五〇パーセント以上を占めています。また女性の演劇芸術家、画家、監督も輩出しています。日本の方によく知られている「西遊記」の映画の監督は女性です。数年来、冬休みや夏休みごとに上演してもあきないほどの人気です。このように中国女

性はあらゆる部門で活躍し、大きな成果を上げています。

ほとんどが夫婦別姓、農村女性も著しく地位向上

法律上では中国の女性は独立した姓名権を獲得しました。解放前でも姓名について、あまり厳格な法律はありませんでした。旧社会でも、少ないけど母の姓を使う人もいました。日本は違いますね。『あこら』を読んで初めて知ったのですが、どうして結婚したら夫の姓にしなければいけないのか、中国人には理解できません。旧中国では結婚したら夫の姓に従い、子女は父の姓に従うものが多かったのですが、新中国では父母どちらの姓に従っても構わない。自由です。私の知人の北京对外贸易経済大学の汪教授の家では、息子は母親の蘇を名乗っています。その息子の女の子は、母親の姓の耿を名乗って、男の子は蘇を名乗っています。ですから一つの所帯の中に汪、蘇、耿の三つの姓があるわけです。中国では珍しくないことです。私も離婚した日から、二人の子を私の姓にしました。

私は、七〇年から、湖北省の農村で野良仕事をしましたが、そのとき見た農村女性は、老若を問わず、みんな野良仕事だけをしていましたが、今は、郷鎮企業に就職し、その発展を促す上で、重要な役割を果たしています。郷鎮企業の労働者は一億人余いますが、そのうち女性は約四千万人です。江蘇省、浙江省、河南省の郷鎮企業の中の二、三千人の工場長が女性です。

山東省竜口市の農村は国連開発計画（UNDP）と国連食糧機関（FAO）の選んだ農村女性問題に関する国際監督調査地です。同地の農村婦人は四〇ないし六〇%の農作業を負担しているだけ

でなく、繊維・アパレル・刺繍などの郷鎮企業の中でも七四%の生産任務を担っています。彼女たちの作った刺繍工芸品は毎年輸出で二百五十万ドル近くの外貨を獲得できます。ここ数年来、同地を視察した二十余国の百余名の専門家に竜口の農村女性は男子と同じく重要な役割を果していると認められました。このように中国では、奥地の農村を除いて、昔のように女性を軽んじたりすることがなくなりました。

就労している女性に対しては全面的な労働保護措置をとっています。出産有給休暇は工場や部門によってちがいますが、三か月か半年、一年間のもあります。政府機関や学校はせいぜい半年までです。

このように妊娠出産保障は完備していますが、中国女性は男子と平等な就業の権利を享有しています。女性従業員は社会の従業員総数の約四四%を占め、世界の平均、三四・五%を上回っています。同じ業種、同じ職種で技術の熟練程度が同じ労働者は、同等の賃金を獲得できますが、男女従業員の教育水準、業務資質と職業構成の違いによって、実際の収入は一定の格差があります。でも政府機関や学校では差別が全然ありません。日本のようなお茶汲みの仕事はないです。各機関や学校、工場ではボーイラームがあります。お湯を沸かす給仕が各室の魔法瓶にお湯を入れておきます。それで各々自ら持参の湯呑を使います。

中国の女性は経済面の独立によって家庭でも経済や重要な事柄に対して、男子と同じように管理決定実権を持つようになりました。共稼ぎの家庭では、退勤後、先に帰宅したほうが夕食の仕度をします。休日には一緒に家事を担ってやるのが普通です。夫婦はともに家庭財産の所有者であり、平等に家庭財産を支配し使用しています。今、若者の家庭ではむしろ、夫の方が多くの家事を担う

るから、姑はいじめることができないのでは、と思います。

Q 夫婦共働きで、子どもはどういう生活をしていますか。

都市では各官公庁、工場、学校には託児所（零歳—三歳）、幼稚園（三歳—六歳）などの施設が設けてあります。出勤前にそこに預けて通勤の時に迎えに行きます。また全寮制の託児所や幼稚園もあり、週末の夕方引き取りに行つて、月曜の朝に子供を送ることもできます。大学、小中学校にも幼稚園があります。教職員は出勤する時連れていって、一緒に帰ります。収入のいい人は、お手伝いさんを雇います。

張晶（中国『科技日報』東京支社記者） 日本の男女平等は、子どもの頃から教育しなければならぬと思います。中国では男性も料理をして、家事も平気でやっています。家庭のことは男の子でも女の子でもやらなくてはなりません。ある仕事は女の仕事、ある仕事は男の仕事という概念はありません。料理や家事のうまい夫は近所から褒められます。私の夫も、私よりずっと料理が得意です。全体の社会がそういう雰囲気です。日本は皆さんはそういうところから教育しなければならぬと思います。

司会 中国の事情について民間の立場からの具体的なお話をいろいろとありがとうございました。この十一回の講座も、今日で終わりです。長い旅路を共にしましたが、北京が近くなりましたでし

い物をして——というお決まりのパターンになっているそうです。

ナイロビの時はたくさんの方の日本女性が行きましたが、大部分が観光旅行で残念な思いをしましたので、地域の皆さんからもそれぞれの自治体に、「必ずしもワークシoppを開かなくてもいいから必ず収穫を得てほしい」とお願いの手紙を出していただきたーいと思っています。

ただナイロビから十年経っていますので、女性の学習も進んでいて、熱い思いを抱いてワークシoppを持つとうとしてゐる方も多いのですが、日本の通常の学習形態が「承り講座」が多いので、突然北京に行つて納得できるワークシoppが開けるのかという疑問もあります。ワークシoppというのは作業場という意味で、皆で一緒に仕事をするということです。だから一人が発表して、皆がそれを承るといふ形は一番良くないことです。全員が参加できて、そのテーマがインターナショナルであることが大切だと思います。

ナイロビのとき非難が集中したのは、日本の女性は自慢話はかりするという点でした。「こういう婦人会館を建てた」とか、「こういう学習をしている」とかで終わる、と。「その結果何をしたか」ということを言わないと、発表するに値しないのではないかと言われ、赤面しました。ナイロビの時、私は後始末で少し残っていましたので、いろいろな国の人に「日本の女の態度は何ごとか」と、まるで私が代表みたいにお叱りを受けたのですが、その指摘は事実を鋭く衝いている面もあり、反論できなかったのです。

どれだけ共同作業をして、どれだけ世界の人たちと知り合つて、二度と戦争をしない状況を作るかということがNGOの目標だろうと思います。そのためになんという形で、お互いが手と手を結びあえるかということが、一番のキーポイントだと思っています。

初めての方が、ただのオブザーバーとしていらしても、もちろんかまわないと思います。ただその方が目をピカピカ光らせて、ご自分の皮膚感覚で収穫を得ることは心掛けていただきたいと思います。たとえば、NGOの会場には、大きな掲示板に、思い思いの情報を貼り出せるようになっていきます。多分今回も、沢山のインフォメーションが壁にピンナップされていると思います。それを眺めるだけでもおもしろいのですが、大部分の日本女性ほとんど一顧もしないで通り過ぎるのです。宝の山なのに勿体ないのです。ワークショップでなくても、すれちがった人とブロークンでも何でも話し合えば何か生まれます。あらゆるチャンスを利用して、与えられたものを体に吸い込むという姿勢があれば、いいと思います。

Q 今回初めてですが申し込みを全部自分でやってみようと、二月六日に国際書留で出したのですが、何も言っていないのです。婦女聯の「三月いっぱい申し込みれば二割引きになる」という話はどうなるのかなと思います。もう一つ、日本の旅行社が中国へ行つて様子を見たら、宿泊は国連の許可を待っていたら間に合わないということで、受け付けを始めたらしいのです。婦女聯が持っている宿泊施設は全体の二割ということですが。

司会 登録は、去年の九月に申し込んだ人も返事が来ない、と全国からの問い合わせが私どもにも毎日のように来ますが、日本とアメリカは、一番最後になるそうです。また、婦女聯が押さえている宿泊施設は四割です。旅館の四割は会議のために押さえてあるのです。国が先頭に立つて宿泊代を上げたというので国内でも非難の声が出ているそうですが、これは日本の旅行社が上げたのです。

そのために問題が起きていますが。二割引というのは三月末までに申し込んだ場合です。返事が来なかったら、申請書と書面の写しを添えて申し込みをしたら引いてくれるはずです。

政府がコントロールしていないホテルで格安のところもあるそうです。これは日本人はほとんど押さえていないので、他の国の方が困るということはないそうです。

ただ婦女聯の方が「日中大会ではないのだから、日本人ばかり来ては困る」と何度もおっしゃっているのは事実です。北京会議に参加したことを「勲章」のように考える方は、遠慮なさったほうがいいと思います。

考えてみますと、今度のように予約しろとか、写真をつけろと言われたのは初めてで、今までは現地でも受け付けていたのですが、今回は主催国が計画経済の国なので、早めに押さえて対応を早くしたいということがあるようです。

Q 〈あこら〉もホテルは組織を通さない形で押さえたのですか。

婦女聯は登録しない人は泊めないと言っていました。現実には六割の自由契約が認められていることがわかりました。私どもも自治体などから、一緒に連れて行ってくれと頼まれたもので、万一路頭に迷うと思うって押さえました。

Q 〈あこら〉としてのワークショップはどういうものを計画されているのでしょうか。

へあこらへは北海道から沖縄まで拠点がありますので、それぞれテーマが違います。九州はセクハラ、東海は女性の仕事をどう作るか、阪神大震災の救援活動で学んだことなど。全体を流れるテーマは「戦後五十年の総括と、不戦の構造をどう構築するか」で、できるだけ世界、とくにアジアの女性たちと率直に話し合いたいと思っています。会場は十日間通して申し込みました。

Q 九月四日はジャパンデーと聞いたのですが。

その話は聞いていませんが、やるかも知れませんね。今まで三回の世界女性大会の例では日本大使館が毎回開いています。ジャパンデーには大使館にエリートの方をご招待します。私などは「斎藤さんはご遠慮下さい」なんて、女性大使にわざわざ言われたこともありましたが（笑）。お上のジャパンデーではなくNGOのジャパンデーが開けるといいですね。でも数千人もの日本人が押しかけるとすると、「毎日がジャパンデー」という感じになるでしょうから、少し控えたほうがいいかもしれませんね。それよりも、日本人はとにかく一般情報にうといので、一日一回でも集まって情報交換すれば、有意義かもしれません。

中国のいろいろな職業の方とも話し合いたいのですが、婦女聯に頼みますと、婦女聯ご指定の優秀な方が揃いますので、普通の方と話し合いたいと、現地の中国の方に頼んであります。

また、へあこらへの何号かに出ています。花郷という中国名物の、村中が万元戸になったところは、特に農村の方の参観希望が多いので、連絡を取っています。

（編集部注 そのあと判明した情報で、アジア女性交流のためのテントを九月二日は、日本と韓国

てていますから、必ずうまく行くでしょう」と、おっしゃってました。二万人のところに四十か所ですから、阪神の避難所みたいになりかねないということは、一応覚悟して、ホテルで用をすませて出かけられるといいのでは、と思います。また中国のトイレはドアがないのが普通です。驚かないでください。慣れると、隣同士で会話ができるので楽しいヨという人もいます（笑）。ホテルのトイレはドアもあり、きれいです。

Q 申し込みしたいのですが、NGOの参加登録やビザ申請は？

登録証は「あごら」一九九号につけてあり、申請方法もくわしく説明してあります。ビザ申請はうちのツアーにジョイントする方で、ご希望の方はまとめて代行します。手数料を実費だけいただきますが。ビザ申請には、パスポートと登録証と顔写真を二枚お預かりします。

Q ワークシヨップは有料と聞きましたが。

婦女聯の方の総理府での説明会では有料だとおっしゃったのですが、「ニューヨークに問い合わせたら無料だと言う話だった」という質問があり、「調べて回答する」と回答があったまま、まだ詳細は不明です。今まで有料だったことはないの、多分無料だと思います。有料だとしても、二万円とか三万円といった高価ではないと思います。

それから何度も言いますが、日本のビデオテープは向こうでは映りません。日本のビデオを上映

したい方は、ビデオデッキを日本から一台持つていけばいいと思います。各部屋にビデオやOHP用の電源の用意があります。

ホテルは私たちが普段、日本で泊まっているところより豪華です。私たちが予約しているのは北京飯店といって、北京で一番有名なところですよ。高級ホテルなのでどうしようかと思いましたが、一生に一度の思いで行く方も多いし、天安門のそばで立地条件もいいし、そこにしました。

中国の方の話では、「毎日循環バスが通ると言っても、日本人の感覚で考えては駄目だ」と言われました。私たちはバスが来ると言うのと、二分間隔でどんどん来るとは思いますが、何分間隔かわからないと言われて、別にチャーターすることにしました。時は金なりですから、そういう費用は惜しまないほうがいいと考えました。会場内も広いので、歩いたら三十分はかかるでしょう。

申し込まれた方には説明会を開きますから、その時情報交換をしたいと思います。

〔編集部注〕その後、会場がファイローに変更したため、へあごら〜ツアーは、八月二十九、三十日のみ北京飯店、あとはファイローのホテルに変更しました。なお、万里の長城等は、中国NGO指定のバスを利用することになりました。

では十一回の講座もこれで終わりです。本当に長い間、ありがとうございました。

この講座は東京女性財団から費用の一部を助成して頂いたので続けることができました。女性財団にも深く感謝申し上げます。では、北京でお目にかかりましょう。（拍手）

袁先生のドロナワ中国語

③

中国語の旅行会話

你好。北京への出発も目前に迫りましたね。

旅先でお役に立つよう、今日は早見表をお届けします。

1 あいさつ

1 こんにちは(初めまして)

你好。

2 お早う(朝9時まで)

早上好。または你好。

3 今晚は

晚上好。または你好。

4 私の名前は～です。

我叫～。

5 私のグループは～です。

我是～小组的。

6 私の仕事は～です。

我是新闻工作者(教师・

職員・家庭主婦・工人)

7 どうぞ、どうぞ

请、请。

8 お入りください

请进。

9 お座りください

请坐。

2 お願い

1 お願いします。

麻烦你。拜托了。

2 教えてください。

请教。请告诉我。

3 手伝ってください。

请帮忙。

4 持ってください。

请带着。请拿着。

5 タクシーを頼みます。

我要出租车。

一 イ	二 イ	三 百	四 千	五 千	六 万	七 万	八 千	九 百	十 千	十一 百	十二 百	十三 百	十四 百	十五 百	十六 百	十七 百	十八 百	十九 百	二十 百	二十一 百	二十二 百	二十三 百	二十四 百	二十五 百	二十六 百	二十七 百	二十八 百	二十九 百	三十 百	三十一 百	三十二 百	三十三 百	三十四 百	三十五 百	三十六 百	三十七 百	三十八 百	三十九 百	四十 百	四十一 百	四十二 百	四十三 百	四十四 百	四十五 百	四十六 百	四十七 百	四十八 百	四十九 百	五十 百	五十一 百	五十二 百	五十三 百	五十四 百	五十五 百	五十六 百	五十七 百	五十八 百	五十九 百	六十 百	六十一 百	六十二 百	六十三 百	六十四 百	六十五 百	六十六 百	六十七 百	六十八 百	六十九 百	七十 百	七十一 百	七十二 百	七十三 百	七十四 百	七十五 百	七十六 百	七十七 百	七十八 百	七十九 百	八十 百	八十一 百	八十二 百	八十三 百	八十四 百	八十五 百	八十六 百	八十七 百	八十八 百	八十九 百	九十 百	九十一 百	九十二 百	九十三 百	九十四 百	九十五 百	九十六 百	九十七 百	九十八 百	九十九 百	一百
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----

- 1 お招きいたたぎ、ありがとう
- 2 日中友好のために乾杯！
- 3 一杯いかがですか
- 4 私はお酒が飲めません
- 5 たくさん召上がつて下さい
- 6 とてもおいしいですね
- 7 もう1つ下さい
- 8 おなかいっぱい頂きました

一待^{ダイ}友^{トモ}杯^{ハイ}喝^{カク}一^{イチ}了^{ヲス}。
 二招^{ニソウ}中^{チュウ}一^{イチ}能^{ノウ}吃^{シヤク}二^ニ吃^{シヤク}我^ガ飽^{ハル}。
 シ謝^{シヤク}日^{ニチ}ア喝^{カク}不^フ多^タ好^{コト}給^{キョウ}一^{イチ}吃^{シヤク}
 シ謝^{シヤク}為^{タガヒ}請^{コトナフ}我^ガ請^{コトナフ}很^{ヘン}再^{サエ}我^ガ

- 1 助けて！
- 2 警察を呼んで！
- 3 財布をすられました。
- 4 パスポート（カメラ）をなくした。

救(サツ)命(メイ)！
快(クワイ)叫(キョウ)警(セイ)察(サツ)！
錢(ゼン)包(バウ)被(ベイ)偷(トウ)了(リャウ)。
我(ワ)丢(テウ)了(リャウ)護(フ)照(ズアウ) (照(ズアウ)相(シャン)机(ジ))。
那(ナ)个(ゲ)人(レン)是(ス)犯(ファン)人(レン)。

那个人是犯人。

這里沒看見照相機嗎？

6 (地図を示して) ここまで願います。

請^{チン}去^{チュ}這^{ズオ}地^ヂ方^フ。

7 料金はいくらですか。

車^{チュ}費^{フイ}多^ド少^ス錢^{チェン}?

3 たずねる

1 お名前は

你^ニ貴^{グエイ}姓^{シン}。

2 お住まいは

家^{ジャ}在^{ザイ}哪^ナ儿^ル?

3 お年は(若い人に)

多^{ドウ}大^ダ歲^{スイ}数^{スウ}?

(年輩の人に)

// // 年^{ネン}紀^ジ?

4 お仕事は

你^ニ做^{ズオ}什^{シェン}公^{ゴン}工^グ作^{ズオ}?

5 いま泊っているところは

你^ニ現^{シェン}在^{ザイ}住^{ズウ}哪^ナ儿^ル?

6 ~のワークショップはどこですか

スウアン^{スウ}タイ^{アン} イェン^イタウ^{タウ} フエイ^フイ^イ スワイ^ス ナー^ナル^ル ?
~專^ズ題^タ研^{ヤン}討^{タウ}会^{ヘイ}議^イ在^{ザイ}哪^ナ儿^ル?

4 買物

1 この品物を見せて下さい

請^{チン}給^{グイ}我^{ウオ}看^{カン}々^{カン}那^ナ个^ゴ。

2 これはいくらですか

這^{ズオ}个^ゴ多^{ドウ}少^ス錢^{チェン}?

3 ほかにありませんか

还^{ハイ}有^{ヨウ}別^ベ樣^{ヤン}的^ダ嗎^マ?

4 高すぎます。まけてくれませんか

太^{タイ}貴^{グエイ}了^ラ。能^{ネン}便^{ベン}宜^イ些^{シェ}嗎^マ?

5 手製のはありますか

有^{ヨウ}手^{スオ}工^グ做^{ズオ}的^ダ嗎^マ?

6 同じものを八つ下さい

同^{トン}樣^{ヤン}的^ダ要^{ヤウ}八^ハ个^ゴ。

7 これより少し大きい(小さい)のがほしい

想^{シヤン}要^{ヤウ}比^ビ這^{ズオ}大^ダ(小^{シャウ})一^イ点^{チン}几^エ的^ル。

7 病気になった時

- 1 医者を呼んで下さい
- 2 病院に連れて行って下さい
- 3 どこが悪いのですか
- 4 a. ここが痛い、ひどく痛い
- b. かぜを引きました
- c. 少し熱がある
- d. 頭痛、咳が出る
- e. 気分がすぐれません
- f. 食欲がない
- g. お通じが悪い
- h. 下痢しています

請^{チン}叫^{ジャウ}医^イ生^{シン}来^{ライ}。
 請^{チン}帶^{ダイ}我^{ワオ}去^{チウ}医^イ院^{ユアン}。
 你^ネ哪^ナ几^ル不^フ舒^ス服^フ?
 這^{ズエ}里^リ痛^ト。非^フ常^{ワン}痛^ト。
 我^{ワオ}感^{ガン}冒^{マウ}了^{ラウ}。
 有^{ヨウ}点^{ディアン}几^ル發^フ燒^{アオ}。
 頭^{トウ}痛^ト、咳^ケ嗽^{ソウ}。
 不^フ舒^ス服^フ。
 胃^{ウェイ}口^コ不^フ好^{ハオ}。
 大^{ダイ}便^{ベン}不^フ通^ト。
 腹^フ瀉^{シャ}。

- 5 北京ホテルの鈴木博さんに連絡して下さい。

請^{チン}給^{ダイ}北^{ペイ}京^{ジン}飯^{ファン}店^{ディアン}的^ダ鈴^{リン}木^ム博^ボ先^シ生^ン連^{レン}系^シ。

8 お別れ

- 1 いよいよお別れです
- 2 お名残り惜しいです
- 3 記念に差し上げます
- 4 ご親切ありがとうございます
- 5 どういたしまして
- 6 ご住所を教えて下さい
- 7 お手紙を下さい
- 8 さようなら、グッドラック

要^{ヤウ}離^リ別^ベ了^{ラウ}。
 真^{ゼン}舍^{シェ}不^フ得^ダ。
 送^{ソウ}給^{ゲイ}你^ネ作^{ズオ}紀^ジ念^{ニアン}。
 謝^{シェ}々^{ツエ}你^ネ的^ダ好^{ハオ}意^イ。
 哪^ナ里^リ、哪^ナ里^リ。別^ベ客^ケ气^キ。
 你^ネ的^ダ地^{ディ}址^ズ請^{チン}告^{ガオ}訴^ス我^{ワオ}。
 請^{チン}来^{ライ}信^{シン}！
 再^{ザイ}見^{ジェン}！祝^ズ你^ネ好^{ハオ}運^{ユン}！

充実した生を生き切って飛び立った

——神戸 明美さん

山 本 璣 子

あごらめい

練馬区の婦人学級で斎藤千代さんの

連続講義を受けて自己革命、へあごらジュニアを呼びかけて十五年、その中心になってこられた神戸さんが、くも膜下出血で突然亡くなられました。

あんまり急なことで、ほんとうに驚きました。まだ時々あの方がこの世から

いなくなつてしまわれたことが信じられなくなりす。いつも元気で、お会いするとこちらのほうがハツパをかけられて、背筋をピンとしなければという気にさせてくれた人でしたから……。

最近では老人問題に力をいれ、特に、〈寝たきり老人をかかえる家族の会〉

で懸命に活動されておられました。

今年に入つてからは、念願でいらしたご自宅の建て替えを始められ、古くからの大きな家でしたから、ほんとうに大変だったようでした。まだその建築も半ばで、さぞご無念だったと思います。

日頃の数々のご活動にくわえ、ちやうど都知事選、統一地方選、そのご苦労も重なつて、お疲れが一度にでたのかもしれないね。

しかし、彼女がああ婦人学級を受けてられてすつかり自己革命をしてからの十五年、実にめざましい活躍をされ、

その中に生き甲斐を持たれ、ご自分の生き方を肯定して生きていらしたと、私は感じました。

ご葬儀の時の長い長い人の列を見ながら、彼女はこれお一人お一人に息の通つたコミュニケーションを持つていらしたんだと思いました。

早すぎる死に、私もほんとうにほんとうに無念ですが、彼女の写真の前で「充実したすばらしい人生を送られたわね」と言つてお別れして参りました。

合掌



時代を導いた輝く星

——田中寿美子さん

斎藤千代

あごらめいど
あごらめいど
あごらめいど

田中先生がとうとう亡くなられた。

〈田中さんを偲ぶ会〉の帰途、樋口恵子さんと、もしも市川さんと田中さんが生きておられたら、日本の政治も、ここまで悪くなることはなかったろうと話し合った。

お二人が参議院でご活躍だったころ、超党派の女性議員連盟は縦横無尽の活躍をした。「あの頃より女性議員の数は遥かにふえているのに」という樋口さんの慨嘆に、私も同感し、政党が全国区に看板スターとしての田中さんを引き回し、ついにご健康を損ねてしまったことを、二人で改めて嘆いた。

議員になられる少し前から、先生は、

社会主義路線よりも文化人類学的な視点から女性問題を見直すことに興味を示され、先生の生き生きとしたご発表は、私たち若輩に、いつも大きな刺激を与えた。先生が議員になどなられずに学究の徒として次々にご著書をご発表になられたら、日本の女性学にも女性運動にも、どれほどのインパクトを与えたかしれないと、その無念さを述べると、樋口さんはキツと顔色を変えて、「実は、私も田中先生に何度も何度も出馬をすすめられたのよ。最後に、『私は田中先生のようになりたくはな

い』と申し上げると、先生は「そうねえ」と折れてくださった」と、秘話を語って下さった。

先生のご著作の目録をつくった駒野陽子さんは、「山ほどのご著作があつていいはずなのに、先生ご自身の名によるご本はほとんどないのよ」と驚いておられたが、文筆の人としても一代に名をひびかせるはずだった先生が、その学識と哲学を傾けて政治の場に立たれたからこそ、あれほどの大きな働きをなさったのではないかと、私は思う。学究の徒でいらしたら、恐らく百歳までもますます冴えわたるご頭脳で多くのご著作を世に出されたりと思うと胸が痛むが、哲学と思想があつてこそ政治家は意味を持つ。神は、あつてほしい政治家の理想を託して、田中さんを政治の道にお運びになったのだらう。

*

田中先生に最初にお会いしたのは一九五四年一月、ある学友の通夜の席だった。その帰り道、級友が、「あんな美しい上司がいて、なぜ自死したのだろう」と、友人の死をふしぎがったが、私は沈黙していた。彼女はいずれ自死するだろうと私が予感していたのは、戦争の衝撃のなかで私自身も久しく自死願望を抱き続けていたからだ、あまりにも美しくあまりにも聡明で、しかも世代の違う上司に、自分なら心の内を語ることはいだろうと、まだ若かった私は思った。

多分、そんな経緯があつたからだろう、六〇年代の初め、日本婦人問題懇話会の設立準備段階で田中さんにお目にかかりながら、私は何となく近づきがたかった。懇話会の発起人、山川菊栄先生には、ひと目お会いした時から、

何ともいえない親近感を抱いたのと対照的だった。(いかにも明治の女子学徒といった山川先生は、母の面影にも似ていて、私は内心、「先生」というよりは「さん」で呼びびしていた。)

懇話会が発足した頃の田中先生は、美貌と才智で輝くほどまばゆい存在だった。先生は多くの会員の中でも、樋口さんや赤松さんのような才智の人を目立って溺愛され、その頃、全く内向的だった私は、自分のような才智のない者は……と、ますます後ずさりした。親しくお話ができるようになったのは、懇話会の監事会が先生のご自宅で開かれるようになってからだと思う。

赤松さんも私も、よく子連れで参加した監事会を、先生はいつも手料理で盛り立てて下さった。先生のお料理は手早くてしかも手際がよかった。同時にご飯のよそい方、よそつたあとのおひ

つの中の始末まで、マナーも厳しく、「これは姑にしつけられたことよ」と、そういう庭訓を、若い者に伝えようという感じで話して下さった。

「懇話会是我的生きがいなの。この会のためなら、どんなことでもしたい」とおっしゃった時の、公の席ではみられないやさしいまなざしが、今もまぶたに残っている。監事会では、女性問題の現状と未来が、先生の該博な海外情報も含めてことこまかに語られ、私にとつては数々の分科会以上に勉強になった。

*

私が、先生に初めてお目にかかったのはYさんの通夜の席だったことをよくよく告白したのは、多分三十年以上経ってからだったと思う。

先生の第一声は、「おいくつになられました」だった。一瞬驚いたそのこ

質問の意味は、実は、一つ年上だった
学友の年をおたずねになったものだつ
たと、今になってしみじみとわかる。

先生は、Yさんのことを「非常に期
待していた」と、口をきわめて絶賛さ
れた。他の部下への配慮もおありだつ
たのだろう、通夜の席では口になさら
なかつたその讃辞は、亡き人へのはな
むけのように聞こえ、私は先生との間
の见えない壁が、はじめて崩れ落ちる
のを感じた。しかしその頃から、先生
ご自身の病魔も深まつていった。

〔編集後記〕

北京会議に間に合わせなくては、と、
北京会議への講座の未掲載分に紙幅を
使い、定例ものも連載も休載になりま
したことをおわびします。

総理府の把握で五千人、旅行社の情
報では八千人が北京に向かうようで

「死ぬまでにどうしても書き上げな
ければならない本があるのよ」と言い
続けておられたご本が「ジュシマ・マ
ンシュルさん物語」だったのは、意外
でもあり、なるほどと納得もできたが、
病をおして上梓されたご安堵からか、
ご病勢はその後快方に向かうことはな
かつた。

折々のお便りのご筆跡が次第に乱れ
てくるのはつらかつた。多分、ずいぶ
んな時間をかけてお書きになったと思
われるお便りには、毎度のように「あ

す。へあこら」のワークシヨップは、
「戦後五十年、不戦の構造を考える」
一本に絞りこみ、アジアの方々の怨も
悲も受けとめて、不戦の構造を共に構
築したいと考えています。

たまたま北京に行ける者だけの集い
にはしたくないと、不戦のメッセージ

なたのようなやさしい方は」というお
言葉があり、恐縮した。人をやさしい
人と思うほどの深いやさしさにあふれ
ていらした先生を、はるかな高嶺のよ
うに、いささかのおそれをもつて、た
だ仰ぎみていたことが悔やまれた。

先生の最期のお顔は、ほんとうに静
かで穏やかでお美しかつたという。お
別れに参上できなかつたけれども、先
生がまかれた無数の種は、それぞれが
一粒万倍になります、と、私は星を見
上げて申し上げた。

も募集しています。ハガキに、なるべ
く大きな字でメッセーじとご署名を書
いてお送りください。あるいは三十七
センチ角の布にメッセーじを。貼り合わ
せて展示します。八月二十五日までに
お送り下さい。

では皆様のお心と共に飛び立ちます。

▼北京会議NGO会場で“不戦”を誓いませんか

日本の国会の「不戦決議」は、国民の期待から大きくはずれたものとなり、慰安婦謝罪は民間募金にすり変えられました。女たちの心をこめた謝罪と不戦の決意をこめた文章に、すべての賛同者の名を連ねて、北京に持って行き、展示したいと思っています。

八月には、とりあえず、アクリル板または布地に全賛同者の名を書いて持って行き、ワークショップの会場に十日間展示しますが、将来はそれを碑にして、永遠の平和を誓いたいと思います。賛同費は一口五百円以上。NGOフォーラムに参加する方も、しない方も、お志のある方は、郵便振替001501101579176あごら旅の会 口座にお振り込みください。

ハガキにメッセージと、ご署名をなるべく大きな字で書いてくださるか、不戦メッセージを書き込んだ三十センチ角の布をお送りくだされば北京に持っていき、展示いたします。受付期間は八月十五日―二十五日です。

“女たちの不戦表明”原案を考えたい方も、原案をどしどしお送りください。

送你先 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4

FAX 03-3354-9014

あごらNGOフォーラム係

あごら 210号 ●発行 1995年8月10日

●編集 あごら編集部

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替00100-0-5264

●発行人 あごら企画会議 定価1177円(1143円+税34円)

この ひろい宇宙に
たった一つの地球

その 大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえのない地球

かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから

たいせつに たいせつに しよう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあーらー

人と人の出会うひろば

へあーらー

人と人の共に生きるひろば